日本生化学会65年の歩み

—1990—

社団法人 日本生化学会

名誉会員 島 薗 順 雄

日本生化学会65年の歩み

—1990—

社団法人 日本生化学会

名誉会員 島 薗 順 雄

島薗順雄（東京大学名誉教授・日本生化学会名誉会員）：

日本生化学会65年の歩み —1990—

Norio Shimazono (Prof. Emer. at the University of Tokyo, Honorary Member of the Japanese Biochemical Society)：

Past sixty-five years of the Japanese Biochemical Society

生化学　64, No.9 (1991) 掲載記事原稿

目　　次

Ⅰ．任意団体の時代（1925－1965）…… 1

設立の経緯 …… 1
大正14年（1925）から昭和18年（1943）まで …… 4
第２次大戦の戦中，戦後 …… 6
昭和23年（1948）から昭和28年（1953）まで …… 11
昭和28年（1953）から昭和40年（1965）まで …… 13

Ⅱ．社団法人設立以後（1965－1990）…… 25

社団法人の設立と運営 …… 25
会　員 …… 28
役　員 …… 33
大会その他の研究発表会 …… 37
和文誌・英文誌および専門書の刊行 …… 39
研究・教育の奨励・推進と表彰 …… 42
内外の関連学協会との連絡・協力 …… 44
別表１．大会シンポジウム題（1965－1990）…… 46
　　２．奨励賞受賞者（1965－1990）…… 48
別図１．第４回総会記念写真（1928年10月，金沢）…… 52
　　２．第11回総会記念写真（1935年10月，東京）…… 54
　　３．第26回総会記念写真（1954年４月，仙台）…… 56
　　４．第37回総会記念写真（1964年10月，名古屋）…… 58

日本生化学会65年の歩み

日本生化学会が会則を創定して発足したのは大正14年(1925)4月4日のことで，その後40年を経て昭和40年(1965)9月1日をもって社団法人日本生化学会が発足し，その後も発展の一途をたどって今日に至った。ここに創立以来65年，法人設立以来25年の機会に，この歳月の間におけるこの学会の歩みをふり返って見ることとする。

Ⅰ．任意団体の時代(1925～1965)

設立の経緯

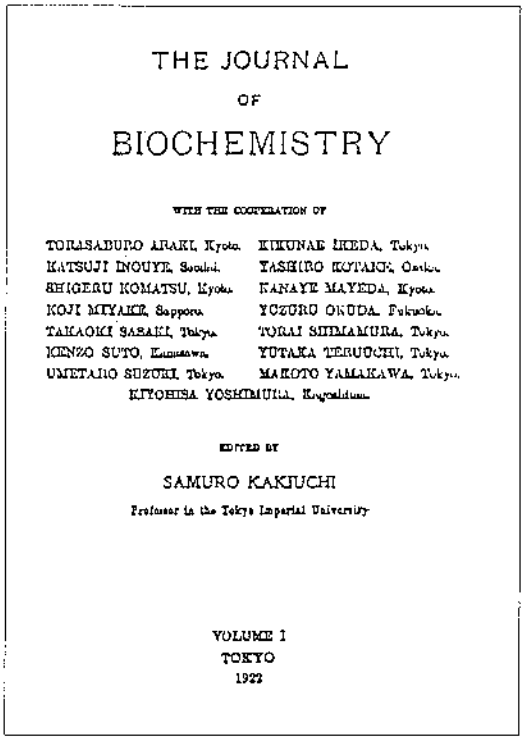
大正7年(1918)4月，柿内三郎教授が東京帝国大学医科大学の医化学講座担当教授として初代隈川宗雄教授亡きあとを引きつがれてから，学会を設立して年に一度くらい集って専門上の意見を交換するような機会があればよいという希望が多くの人々から聞かれた。柿内教授は教授就任後，日本の研究業績を世界の学界に発表する必要を痛感し，同時に外国の人たちにも紙面を提供する専門誌として「外字生化学雑誌」(Journal of Biochemistry)を個人で刊行を企てた。この雑誌は第1巻1号を大正11年(1922)1月に発刊し，編集者(editor)として，柿内教授が当り，協力者(co-operator)として，はじめ医学関係から荒木寅三郎(京都)，井上嘉都治(仙台)，古武弥四郎(大阪)，前田　鼎(京都)，佐々木隆興(東京)，須藤憲三(金沢)，照内　豊(東京)，理学関係から池田菊苗(東京)，小松　茂(京都)，農学関係から山川　洵(東京)，三宅康次(札幌)，奥田　譲(福岡)，島村虎猪(東京)，鈴木梅太郎(東京)，吉村清尚(鹿児島)の諸氏が名を列ねていた。第1巻は1月，4月，7月に発行され，菊版総頁515頁である。刊行の辞に柿内教授は，“May this little Journal of Biochemistry have a prosperous future and be a contribution, though small, toward the promotion of true knowledge.”と記している(図1，2)。

研究業績を話しあって意見を交換する会としては，東京において柿内教授を中心として大正11年(1922)初めから「東京生化学者宵の会」という会合が本郷燕楽軒において持たれ，3年半の間に18回の会合を重ねていた。「生化学」という言葉も柿内教授の発案になるもので，大学医科には明治の時代から医化学と呼ぶ講座があったが，医療のための化学ではなく広く生命現象を化学的に究明する科学として「生化学」の名を案出されたものである(図3)。

学会の創設に当っても医学，理学，農学，薬学など広い範囲の生化学者を糾合する構想で，まず大正13年(1924)12月外字生化学雑誌の協力者に相談があった。そしてほ

図1．柿内三郎教授
(1882－1968)

図2．Journal of Biochemistry
第1巻(1922発行)の扉



THE JOURNAL

OF

BIOCHEMISTRY

WITH THE COOPERATION OF

TORASABURO ARAKI, Kyoto. KIKUNAE IKEDA, Tokyo.
KATSUJI INOUYE, Sendai. YASHIRO KOTAKE, Osaka.
SHIGERU KOMATSU, Kyoto. KANAYE MAYEDA, Kyoto.
KOJI MIYAKE, Sapporo. YOZURO OKUDA, Fukuoka.
TAKAOKI SASAKI, Tokyo. TORAI SHIMAMURA, Tokyo.
KENZO SUTO, Kanazawa. YUTAKA TERUUCHI, Tokyo.
UMETARO SUZUKI, Tokyo. MAKOTO YAMAKAWA, Tokyo.
KIYOHISA YOSHIMURA, Kagoshima.

EDITED BY

SAMURO KAKIUCHI

Professor in the Tokyo Imperial University

VOLUME 1
TOKYO
1922

とんど全員の賛成を得，間もなく会則に関する意見もまとまり，上記のとおり大正14年(1925)4月4日会則を創定，発起人連名をもって趣意書を四方に飛ばして同好の士を勧誘することとなったのである。発起人として名を列ねているのは次の人々である。

［医学関係］：柿内三郎(東大医学部)，赤松　茂(千葉医大)，朝川　順(愛知医大)，後藤基幸(京都府立医大)，後藤元之助(九大医学部)，井上嘉都治(東北大医学部)，岩野俊治(奉天医大)，加藤七三(熊本医大)，川北元三(新潟医大)，古武弥四郎(大阪医大)，前田　鼎(京大医学部)，永山武美(慈恵医大)，太黒　薫(北大医学部)，佐々木隆興(佐々木研究所)，清水多栄(岡山医大)，須藤憲三(金沢医大)，照内　豊(慶応医学部)，富田雅次(長崎医大)

［理学関係］：小松　茂(京大理学部)

［農学関係］：三宅康次(北大農学部)，奥田　譲(九大農学部)，島村虎猪(東大農学部)，吉村清尚(鹿児島高等農林)

会の組織は生化学の研究に従事し，またはこれに興味を有する者を会員とし，会費年額7円。会員は各所在地に可及的に地方部会を構成することとし，各地方部会は毎月もしくは1年数回例会を開く。また毎年1回各大学所在地において順次総会を催す。総会のためには開催地の常務委員と若干名の新しい委員を挙げて臨時に総会委員を構成し，その運営に当る。委員の任期は1年で，重任を妨げない。集会のほかの事業としては会報(日本生化学会会報)の発行があり，当分の間，隔月1回の発行で，各地方例会の記事，会員動静，内外生化学界の重要な記事，会員の寄稿(綜説)を載せるが，原著は載せない。事務所は当分東京帝国大学医学部医化学教室(1927年生化学教室と改称)におく。

以上のような会則で，会員のために胸章を制定した(図4)。この学会の特長として，主体は連合した地方部会にあり，会長も会頭も置かず，部会代表委員を置くにすぎない。学会の第二の特長はFraternityで，先輩新進の別なく会員はすべて対等で，すべて名前は「さん」づけで呼び，親しみのあるなごやかな集会を持とうということであった。

そこで関東，名古屋，京都，大阪，岡山，長崎の各地の部会の相談会が持たれ，部会代表委員として

照内　豊(関東)，朝川　順(名古屋)，小松　茂(京都)，松岡全二(大阪)，清水多栄(岡山)

などの諸氏が決定し，関東部会では上記発起人のほかに，

［医学関係］：菊池　貢(海軍軍医学校)，小泉親彦(陸軍軍医学校)，杉本好一(栄養研究所)，藤井暢三(東京帝大医化学)，有山　登(東京帝大医化学)，河本禎助(東京帝大伝染病研究所)

［理学関係］：柴田桂太(東京帝大理学部)，左右田徳郎(東京帝大理学部)

［薬学関係］：服部健三(東京帝大薬学科)
［工学関係］：厚木勝基(東京帝大工学部)
［農学関係］：山川　洵(水産講習所)，山本　亮(理化学研究所)
の諸氏が委員となった。

その当座，地方部会が全国にくまなく成立したわけではなく，部会のうち最も活発に活動したのは関東部会であった。

大正14年(1925)から昭和18年(1943)まで

関東部会では隔月1回例会が持たれることとなり，その第1回は1925年6月20日慶応大学医学部講堂で開かれ，80余名出席，7題の報告演説があった。また京都部会の第1回例会は1925年6月23日に京都帝国大学楽友会館で開かれ2題の講演があり，出席者は70名であった。

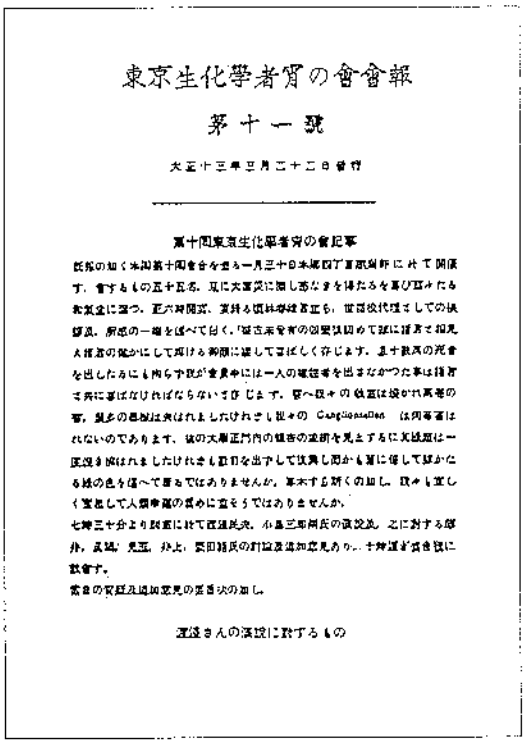
日本生化学会第1回総会は1925年10月31日から11月2日までの3日間，東京本郷区仏教青年会館で開かれた。出席者130名。演説は交見演説と報告演説とに分け，前者は各地方部会から1題ずつ推薦されたもので，次のとおりであった。

松岡全二(大阪医大)：Kynuren-酸の生成について
米村貞知(岡山医大)：Cholesterin，胆汁酸および蛾毒素の関係について
藤田秋治(愛知医大)：膜PotentialとIon透過性
小松　茂(京大理学部)：柿の実の生化学的研究
岩野俊治(奉天南満医大)：動物体内における抱合性Glucuron-酸の形成について

このほかに報告演説(一般演題)37題。人名はすべて「さん」づけで呼ばれ，講演者や座長の表示なども「……さん」と掲示された。そしてこの慣行は長く生化学会の伝統としてつづいた。10月31日夕東京ステーションホテルで会員懇親会が行なわれ，出席者65名。年齢順に卓を占めたが，須藤憲三さんが漆黒の髪艶々としているのに，10余年後輩の小松茂さんの頭は蕭条として，ただその談論風発の元気さでその若さを示したと記録されている。デザートコースでは諸教授のテーブルスピーチがあった。

当時すでに日本医学会の組織があって，本会成立以来，分科会として加入するよう再三の勧誘があったが，医学のみならず理，農，薬，工など広範囲の分野をもっている本会としては加入を差し控え，日本医学会総会には会員が生化学会とは無関係に生化学分科会を組織して参加することとした。大正15年(1926)4月第7回日本医学会総会が東京で開かれたが，このとき柿内三郎教授を分科会長として本郷燕楽軒で生化学分科会が催された。そのときの発表は(1)インシュリンに関する研究，(2)ビタミンBに関する研究，(3)体液化学に関する研究の3部にしぼり，4月2，3日の両日にわたり24題の演説があり，活発な討論が行なわれた。

日本生化学会会報は，1925年10月第1巻第1号を発刊し，生化学会設立の経過報告，



東京生化學者胥の會會報

第十一號

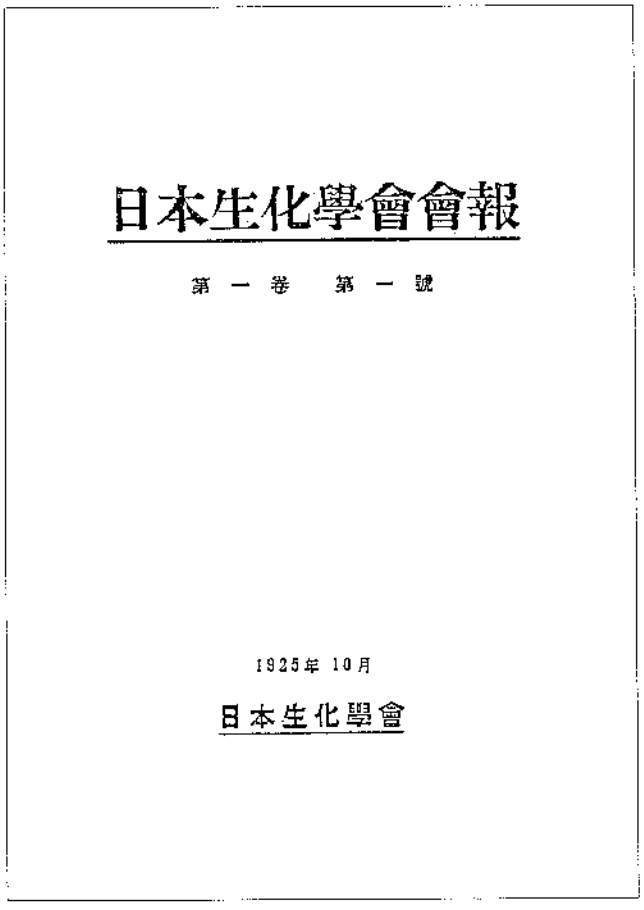
大正十三年三月二十二日發行

第十回東京生化學者胥の會記事

図3．日本生化学会の母体となった東京生化学者胥の会の会報（第11号，1924）

図4．会員胸章。本会設立とともに制定，会員に配布され，会員が総会出席のときにはこれを附けて出席するよう要望された。

図5．日本生化学会報創刊号の表紙（1925）



日本生化學會會報

第一卷　第一號

1925年 10月

日本生化學會

地方部会通信，研究室通信が載せられている(図５)。B5版で，その後も６号をもって１巻とする原則で発行され，原著は掲載せず，総説欄，交見欄，報告演説抄録や通信欄，報告欄よりなる会報*としての編集が貫かれ，広告は一切掲載しない方針であった。第１巻に記載されている会員名簿を見ると，総数368名であるが，その後続々と新入会員があり，1927年末の名簿では総数523名で，医学関係465，理学関係21，農学関係21，薬学関係３，工学関係３の比率である。当時すでに日本化学会はもとより，日本農芸化学会，日本薬学会が活動していた。

日本生化学会の会員数はその後大体400～600名を続けていた。そして毎年総会が開催されて昭和18年に至った。その間の記録は表１のとおりである。昭和９年(1934)の総会は京城で開かれ，昭和14年(1939)の総会は台北で開かれた。総会は特別の理由のない限り秋10～11月のころ開催された。春行なわれる他学会と日取が衝突することを避けたのである。別図１，２に第４，11回総会の記念写真を示す。

1931年の第７回総会において，生化学の和文の用語を統一するため語彙編纂の必要が論ぜられ，その事業が柿内教授に一任されたので，柿内教授は渋谷真一氏助力のもとにドイツ語の術語と邦語の術語とを対照させた原案を作成し，会報10巻(1935)１号から12巻(1937)４号までの巻末に載せた。そしてこれに対する会員の意見を合せ記した「第一次生化学語彙」が昭和16年(1941)12月，小冊子にまとめられ，会員に配布せられた。当初の計画では，この冊子を５年毎に改訂して漸次術語の統一をはかる予定であったが，その計画は冊子発行１回で中断した。(なお，これと趣旨を同じくする事業は，昭和15年(1940)日本医学会に医学用語整理委員会が設けられ，大戦後，文部省学術奨励審議会の中に学術用語分科審議会が設置されたので，本会からも医学用語や化学用語の専門部会に委員を送ってその事業に協力した。医学用語専門部会では松村義寛教授が長くその委員をつとめた)。

第２次大戦の戦中，戦後

昭和18年(1943)10月第19回総会が大阪帝国大学医学部で開かれたが，すでに前々年12月に大戦がはじまり，困難な時機となっていた(図６)。10月29日阪大附属病院恵済団食堂で開かれた委員会で，会則の変更が協議された。本会設立の労をとり，それ以来，中央事務を引き受けて来た柿内教授は昭和18年３月をもって東京帝国大学を退職し，その後任には６月から児玉桂三教授が就任していた。児玉教授はこの席上で会則改正の原案を示し，協議が行なわれた。会員を正会員と準会員に分ち，ともに会費10円。会長１名，顧問，評議員若干名，幹事４名をおき，それぞれ任期１年で重任を妨

*第１巻から第４巻までしばしば各号の冒頭に欧米の著名な生化学者の写真が印象記を添えて掲げられている。また第５巻第１号(1930)は日本の医化学の創始者隈川宗雄の記念号に当てられている。

図6．戦時中最後の総会となった第19回総会の記念写真（昭和18年（1943）10月，阪大付属病院）

最前列左から：高田　蒔，志賀　直，有山　登，赤松　茂，藤井暢三，堀田一雄，富田雅次，後藤基幸，瀬良好太，古武弥四郎，前田　鼎，柿内三郎，末吉雄治，永山武美，児玉桂三，清水多栄，藤田秋治，戸田　茂，正宗　一，岩崎　憲，内野仙治。二列目右端に市原　硬（総会委員）。三列目に応召中の島薗順雄の軍服姿も見える。

表1　日本生化学会総会記録

回数	年 月／日	場所	責任者	出席者数	シンポジウム [交見演説 特別講演]	演題数 一般演題 (シンポジウム共)
1	1925 10/31,11/1,2	東京 (仏教青年会館)	照内　豊，柿内三郎 (総会委員)	130	[5]	37
2	1926 10/29～31	京都	小松　茂，後藤基幸 (総会委員)		[4]	59
3	1927 11/7～9	大阪	古武弥四郎，正井保良 (総会委員)	200	[3]	60
4	1928 10/18～20	金沢	須藤　憲三 (総会委員)	100	[3]	54
5	1929 10/28～30	福岡	児玉　桂三 (総会委員)	100	[4]	60
6	1930 10/13～15	東京 (慶応)	照内　豊 (総会委員)	132	[2]	56
7	1931 7/7～9	札幌	太黒　薫 (総会委員)	89	[2]	50
8	1932 11/5～7	岡山	清水　多栄 (総会委員)	172	[6]	75
9	1933 10/14～16	名古屋	河本　祐助 (総会委員)	118	[2]	52
10	1934 9/22～24	京城	中村　拓，佐藤剛蔵* (総会委員)	86	[3]	52
11	1935 10/17～19	東京 (慈恵)	永山　武美 (総会委員)	186	[2]	54
12	1936 9/20～22	新潟	有山　登 (総会委員)	124	[2]	58
13	1937 10/26～28	長崎	内野　仙治 (総会委員)	123	[5]	61
14	1938 10/15～17	千葉	赤松　茂 (総会委員)	140	[2]	62
15	1939 11/18～20	台北	富田　雅次 (総会委員)	98	[3]	53
16	1940 10/16～18	京都 (京大)	小松　茂，近藤金助 (総会委員)	132	[3]	59
17	1941 10/21～23	熊本	加藤　七三 (総会委員)	100	[4]	53
18	1942 10/16～18	名古屋	堀田　一雄 (総会委員)	120	[3]	64
19	1943 10/29～31	大阪	市原　硬 (総会委員)		[4]	59
20	流会(1944)	仙台予定	正宗　一 (会長)	～	～	～
20	1948 4/1～3	東京 (東大)	児玉　桂三 (会長)		2	78
21	1949 4/6～8	京都 (京大)	内野　仙治 (会頭)		2	110

22	1950 4/27～29	金　沢	岩崎　憲 （会　頭）		2[3]	116
23**	1951 4/2～4	東　京 （東　大）	児玉　桂三 （生化学分科会長）		2[2]	128
24	1952 5/3～5	神　戸	竹田　正次 （会　頭）		2[3]	160
25	1953 4/26～28	東　京 （東　大）	左右田徳郎 （会　頭）		2[5]	175
26	1954 4/26～28	仙　台	正宗　一 （会　長）		2[5]	221
27**	1955 4/2～5	京　都 （京　大）	内野　仙治 （会　長）		2[4]	210
28***	1955 11/1～3	東　京 （東　大）	赤松　茂 （会　長）		1[5]	197
29	1956 10/31,11/1～2	福　岡	広畑　竜造 （会　長）		2[4]	213
30	1957 7/14～16	京　都 （府立医大）	藤田　秋治 （会　長）		1[3]	238
31	1958 7/14～16	札　幌	安田　守雄 （会　長）	400	2[5]	288
32	1959 11/1～3	大　阪	市原　硬 （会　長）		3[2]	278
33	1960 11/1～3	東　京 （日医大）	上代　皓三 （会　長）	1,200	4[3]	294
34	1961 11/4～6	大　阪	赤堀　四郎 （会　長）	1,000	3[2]	332
35	1962 10/30,31;11/1	東　京 （東　大）	田宮　博 （会　長）	1,130	3[1]	380
36	1963 10/29～31	東　京 （東　大）	島薗　順雄 （会　長）	1,500	3[2]	432
37	1964 10/16～18	名古屋	古武　弥人 （会　長）	1,500	4[2]	534

注：　*総会委員として前年から佐藤剛蔵教授が準備に当っていたが，同教授が京城医専校長に任ぜられたので，京城帝大医学部教授に着任された中村拓教授と総会委員交代の申出があった。

**日本医学会生化学分科会を兼ねて開催された。

***創立30周年記念総会

表1付　日本医学会総会生化学分科会記録

回数	年（4月）	場　所	分科会長	回数	年（4月）	場　所	分科会長
第7回	1926	東　京	柿内三郎	第12回	1947	大　阪	市原　硬
8	1930	大　阪	古武弥四郎	13	1951	東　京	児玉桂三
9	1934	東　京	柿内三郎	14	1955	京　都	内野仙治
10	1938	京　都	前田　鼎	15	1959	東　京	島薗順雄
11	1942	東　京	柿内三郎	16	1963	大　阪	大谷象平

げない。会長は総会で推薦され，会長が正会員中から顧問と評議員を委嘱する。年1回総会を開き，なお正会員は所在地で地方部会を構成する。事務所は引きつづき東京大学医学部生化学教室に置く。こういう会則で，顧問として柿内三郎，小泉親彦，小松　茂，古武弥四郎，前田　鼎，佐々木隆興，柴田桂太の諸氏が推薦され，評議員は58名。幹事は末吉雄治(編集)，児玉桂三(編集)，渋谷真一(会計)，松村義寛(庶務)という陣容になった。

柿内教授は，大正11年以来Journal of Biochemistryを刊行していたが*，大戦で海外との交流が絶えたため刊行の意義を失ったので，刊行を打切ることを決意した。最終巻は第36巻で昭和19年(1944)に発行された。この雑誌の廃刊に伴い，日本生化学会は生化学の原著論文を和文誌に掲載することとし，それまで原著を一切採録しなかった「日本生化学会会報」は，第18巻1号(1944年1月発行)から「日本生化学会誌」と改称して和文原著を掲載することとなった。発行部数はやはり500部前後であった。

昭和19年(1944)度に総会を開催する予定地としては第一候補仙台，第二候補金沢があげられ，会長として正宗一教授が推薦された。戦争は苛烈の様相を呈し，予定どおり総会の開催が可能かどうか，あやぶまれた。委員会では生化学者の軍への協力の方途なども論ぜられた。

さて昭和19年になって見ると，戦局は益々緊迫し，予定された仙台あるいは金沢における第20回総会の開催は無理になって来たので，正宗会長は次のような会告を会誌第18巻3号(昭和19年8月発行)の誌上で行なった。

> 拝啓　益々御清穆奉慶賀候　陳者本年度我日本生化学会総会の開催は超緊迫の現情勢下単なる評議員のみの参集によるも困難或は寧ろ差控ふ可きものと被存候　乍然学術研究を以て職域奉公する学究者は今日こそ其努力の速報を忽諸に付す可からざる次第依って会誌編輯当局と協議の結果紙上演説(抄録発表)及び討論を以て本年度第二十回総会に代へ度く存候(云々)

こうして締切10月31日として紙上発表の原稿を募集した。次の会誌第18巻第4号は一般の原著14編および部会記事を掲載して発行されたが，そののち休刊の止むなきに至ったので，上記第20回総会に該当する紙上発表の抄録原稿はそのままとなってしまった。

しかし昭和19年における関東部会の活動はなおつづけられていて，5月28日に第61回例会を東京帝大医学部で開いた。次に10月29日に慶応大学医学部で開いた会は，関東部会例会の規模のものであったが，席上，これを日本生化学会第20回総会とみなそうという話し合いがあった(会誌第18巻6号の巻末に記載。しかしこの話し合いは学

---

*J. of Biochemistry 第25巻(1937)は柿内教授在職25年に際しKakiuchi Jubilee Volumeとして門下および友人より献呈された論文52編が掲載されている。

会の正式の決定とはならなかった)。

会誌第18巻5号は，2年間発行できず，終戦後昭和21年9月30日付をもって刊行されることになった。これには，昭和19年5月受付の論文も1編載っているが，あと8編はその年5月受付となっている。戦後物資の事情が悪くなったことは，次の第6号からの紙質が藁半紙程度まで低下していることで示されている。

昭和21年(1946)度の会長は児玉桂三教授。幹事は赤松茂(編輯)，児玉桂三(編輯)，吉川春寿(会計)，小池五郎(庶務)の4氏。会費は20円。昭和21年1月から12月までの会費納入は192名分と報告されている。また昭和22年(1947)は会費を50円に値上げし，会費納入会員数は221名となっている。そして昭和23年(1948)は会費300円，入会金30円。

昭和23年(1948)から昭和28年(1953)まで

昭和23年(1948)4月，5年ぶりに東京大学医学部生化学教室で戦後はじめての総会(第20回)が開かれることになった。タンパク質およびビタミンB_1，B_2のシンポジウムを含め，演題数78。この会期中，評議員会で新しい会則が決定し，総会に報告された。従来の役員のほかに理事7名をおくこととし，評議員の互選で選出し，会長は評議員会の無記名投票で決定する。総会開催のためには会頭をおく。また会として日本医学会に加入して生化学分科会を構成することとした。昭和23年度の役員は次のとおりであった。

会長　児玉桂三

会頭　内野仙治

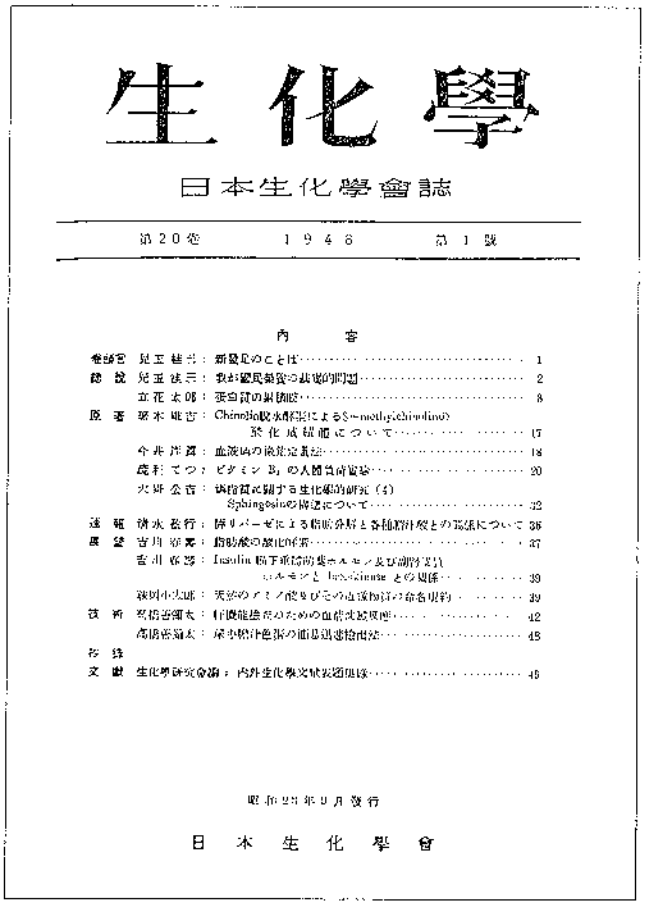
理事　赤松　茂，有山　登，市原　硬，広畑竜造，正宗　一，内野仙治，安田守雄

監事　伊藤良二

このように役員は全部医学系の生化学者であったが，評議員には理学，農学，薬学系の生化学者も入っていた。会長は，このときから昭和28年(1953)の会則改正のときまで児玉教授の重任がつづいた。

日本生化学会誌は，昭和23年(1948)9月発行の第20巻1号から「生化学」と改称して，原著雑誌としての機能を果すとともに，綜説，展望，技術紹介，文献題目集などをあわせ間口の広い雑誌とし，会員外の購入も可能とすることに改められた(図7)。しかしその後の5年間，定期的な刊行はむづかしく，第24巻(1952)まで1年3～4冊の刊行が続いた。

第21回総会の評議員会で，休刊になっている*Journal of Biochemistry*を柿内教授から本会が引きついで刊行することを決定し，昭和25年(1950)6月に第37巻が続刊されることとなった。この巻頭には編集委員の名をもって再刊の辞が載せられている。Editorial Boardは児玉桂三，清水多栄，左右田徳郎の3教授であったが，翌年には



生化學

日本生化學會誌

第20巻　1948　第1號

内容

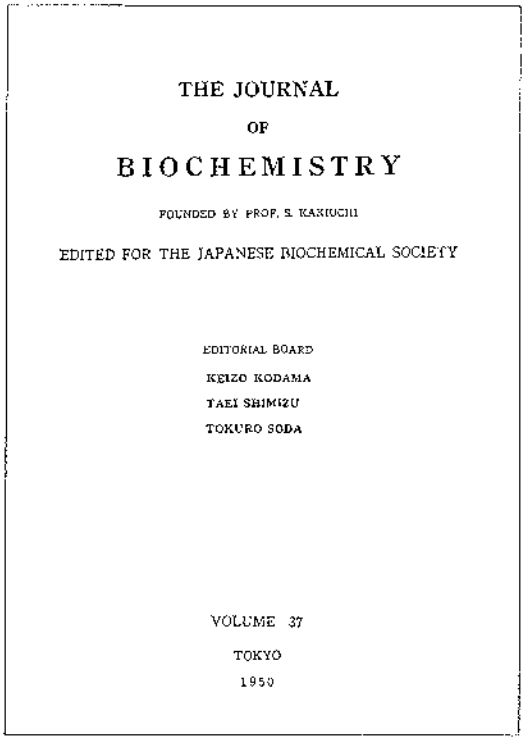
巻頭言　足立桂三：新憲法のことば……1
総説　足立桂三：我が國民榮養の基礎的問題……2
　　立花太郎：蛋白質の酵素學……8
原著　堀木鎮吉：Chinolin脱水酵素によるα-methylchinolinの発酵成績について……17
　　今井洋資：血液尿の微量定量法……18
　　鹿野てつ：ビタミンB₁の人體榮養實驗……20
　　大野公吉：鉄榮養に關する生化學的研究（4）Sphingosinの構造について……32
速報　清水孝行：膵リパーゼによる脂肪分解と各種脂肪酸との關係について……36
展望　吉川春寿：脂肪酸の酸化作用……37
　　吉川春寿：Insulin 膵下垂體前葉ホルモン及び副腎皮質ホルモンと Hexokinase との關係……39
　　荻田小次郎：英語のアミノ酸及びその誘導物の命名規約……39
技術　芳賀弥太郎：作業能率のための血液成分測定……42
　　高橋雅太：尿中糖代謝の簡易迅速檢査法……45
彙報
文獄　生化學研究會編：内外生化學文獄表題目錄……46

昭和23年9月發行

日本生化學會

図7．「生化学」として発足した学会誌第20巻第1号（昭和23年(1948) 9月）の表紙

図8．日本生化学会が復刊したJournal of Biochemistry 第37巻(1950)の扉）



THE JOURNAL

OF

BIOCHEMISTRY

FOUNDED BY PROF. S. KAKIUCHI

EDITED FOR THE JAPANESE BIOCHEMICAL SOCIETY

EDITORIAL BOARD

KEIZO KODAMA

TAEI SHIMIZU

TOKURO SODA

VOLUME 37

TOKYO

1950

田宮博教授も加わり，さらにその翌年住木諭介教授が加わった。体裁は，柿内教授編集の時代のままを継承した(図８)。この頃，国外へ購読60部，交換25部が発送されている。

国際生化学連合(International Union of Biochemistry，IUB)がその第１回会議を英国ケンブリッジで開いたのもこの頃で，1949年８月A.C. Chibnall教授を会長とし，参加者1,523名，講演数497題，参加者の内訳を見ると，イギリス891，フランス126，アメリカ100，スエーデン93，その他で，日本からの参加者はなかった。次回は1952年パリで開かれることになりCourtois教授から日本生化学会に対し非公式ながら参加の勧誘があった。

昭和24年(1949)４月には戦後第２回の総会が京都大学医化学教室で内野仙治教授を会頭として開かれた。翌25年(1950)４月の金沢における第22回総会は，会頭岩崎憲教授が，このような機会に会員日頃の窮乏生活の苦労をねぎらいたいという趣旨から，当時の一般水準を凌いだ豪華な接待が行なわれ，会員一同は能楽堂における懇親能会に招待された。翌年４月の第23回総会は日本医学会総会分科会として東京大学医学部において児玉教授を会長として開催された。昭和26年度から年度が４月１日にはじまり３月31日に終ることになった。１年の会費600円である。そして総会も毎年４～５月に開催された(1955年まで)。

昭和27年(1952)神戸で催された総会の際の理事会では，理事７名が医科系のみによって占められている状況を改め，医５(内，薬１)，理１，農１に改めることとした。そして会長は児玉桂三教授留任で，理事は次の７名となった。

赤堀四郎(理)，赤松　茂(医)，秋谷七郎(薬)，広畑竜造(医)，市原　硬(医)，坂口謹一郎(農)，内野仙治(医)。

また名誉会員の制度を設けて，C. Neuberg，H. Wieland両教授を推薦した。パリで開かれる第２回国際生化学会議には赤堀四郎，江上不二夫，藤田秋治３教授を本会代表として送り，江上教授が本会からのメッセージを携行した。この会議において本会からの国際生化学連合への参加申込が受理され，やがて日本の参加が承認されることになった。

昭和28年(1953)から昭和40年(1965)まで

会則の改正　児玉教授は昭和23年以来会長として本会の運営に力を尽くしたが，昭和27年東京大学を退職し，島薗順雄教授が後任として着任した。その頃幹事の間から会則の変更について種々協議があった。そしてその結果，昭和28年(1953)東京で開かれた第25回総会の際，児玉会長から会則変更の提案が行なわれた。会の運営に会員の意見を反映する途を講ずるために，理事会が中心となって積極的に会務を協議運営するように改め，理事の人数を20名に増し，その医，理，農，薬各系からの人数を会員

数の比率を考慮に入れて８：６：４：２とし，正会員がそれぞれ自らの系の理事を選挙(郵便投票)することによって選出する。任期１年，重任を妨げない。理事のうち１名を常任理事とする。従来の評議員は参与に改める。名誉会員，編集委員の制度を会則に加える。会長は次期総会の主催者がその任に就く，したがって１年で交代する。こういうことで昭和29年度から理事20名が選ばれ，島薗理事が常任理事に指名され，監事１名，参与166名，編集委員10名が決定し，児玉前会長は顧問に推薦された。

名誉会員の推薦　名誉会員については昭和27年(1952)以来，「日本の生化学に貢献された人」として外国人のみを推薦し，総会での特別講演のため招聘した外国生化学者もこれに含まれた。昭和32年(1957)頃になって国内の生化学者も推薦するのがよいという意見が出て検討された結果，65歳以上で本会顧問，会長または会頭の経歴を持つ人を理事会の推薦で総会の承認により名誉会員に推すこととなり，昭和33年(1958)札幌で開かれた総会において，岩崎　憲，柿内三郎，古武弥四郎，児玉桂三，佐々木隆興，末吉雄治，竹田正次，宮田雅次，永山武美，前田　鼎の10氏が推薦された。その後昭和40年９月までに推薦された方々は**表２**に示すとおりである。

運営と集会　昭和28年(1953)に改正された会則は昭和40年(1965)までそのまま続いて，毎年理事の改選が行なわれ，理事会は年４～５回開かれて会の運営につき詳しく協議し，会の運営に当った。島薗理事はこの間常任理事を継続し(会長の１年間を除く)，事務所は本会設立以来の東京大学医学部生化学教室に置かれていた。役員には旅費も手当も支給されなかったが，その点が問題となったことはなく，「手弁当」の運営がつづいた。また在京の若い年齢層の生化学者が本部の幹事として会の運営のため熱心に助力した。本部では常任幹事の仕事を生化学教室員が担当し，女子事務員(初め２名，のち３名)が事務を行ない，トレース専門家１名が雑誌の図表の作製に当った。総会は戦後毎年４月に開かれていたが(第26，37回総会の記念写真を巻末の**別図３，４**に示す)，第27回総会が４月に京都で開かれた昭和30年(1955)の11月，東京において創立30周年記念総会が開催され，そののちは毎年10～11月に総会が開催されることとなって戦前の会期にもどった。日本医学会には分科会として評議員を送り，総会の際は特別講演やシンポジウムに参加したが，生化学分科会を開催することはしなかった。ただし昭和26年(1951)に続いて昭和30年(1955)の本会総会は日本医学会生化学分科会を兼ねて開催された。日本医学会参加の記録は**表１付表**に示してある。

昭和29年(1954)から昭和39年(1964)までの総会とその会長は**表１**に示されている。1960年頃から出席者数や演題数の急激な増加が見られる。その数は，40年前本会が発足したころの10倍である。また理事，監事，編集委員として会のために尽力された方々の氏名は**表３**に示すとおりである。この間地方部会としては，北海道，東北，関東，中部，近畿，中国四国，九州などの部会が組織され，例会を開いて活動した。

本会の**創立30周年記念総会**は，昭和30年(1955)11月１～３日赤松茂教授を会長とし

図9．創立30周年記念（第28回）総会（昭和30年(1955)11月，東大医学部）

最前列椅子席左より：平塚英吉(日本農芸化学会長)，秋谷七郎(日本薬学会長)，鮫島実三郎(日本化学会長)，茅　誠司(日本学術会議会長)，R．K．Cannan夫妻(米国)，A.I. Oparin(ソ聯)，K．Felix(西独)，赤松　茂(本会会長)，佐々木隆興(本会顧問)，古武弥四郎(同)，柿内三郎(同)，前田　鼎(同)，児玉桂三(同)，田宮猛雄(日本医学会長)

表2　名誉会員推薦記録

国内	(推薦年度)	海外	(国籍)	(推薦年度)
柿内　三郎	(1958)	C. Neuberg	(ドイツ)	(1952)
古武弥四郎	(1958)	H. Wieland	(ドイツ)	(1952)
佐々木隆興	(1958)	Karl Thomas	(ドイツ)	(1953)
前田　鼎	(1958)	H.M. Evans	(アメリカ)	(1954)
児玉　桂三	(1958)	G. Bertrand	(フランス)	(1954)
永山　武美	(1958)	A. Butenandt	(ドイツ)	(1955)
末吉　雄治	(1958)	Kurt Felix	(ドイツ)	(1955)
富田　雅次	(1958)	A.I. Oparin	(ソ連)	(1955)
竹田　正次	(1958)	J.P. Greenstein	(アメリカ)	(1956)
岩崎　憲	(1958)	Richard Kuhn	(ドイツ)	(1958)
広畑　竜造	(1959)	Hans von Euler	(スエーデン)	(1958)
左右田徳郎	(1959)	Severo Ochoa	(アメリカ)	(1959)
堀田　一雄	(1959)	Fritz Lipmann	(アメリカ)	(1960)
赤松　茂	(1960)	Robert Ammon	(ドイツ)	(1960)
藤田　秋治	(1960)	Frederick D. Sanger	(イギリス)	(1961)
有山　登	(1961)	René Wurmser	(フランス)	(1963)
市原　硬	(1961)	Van R. Potter	(アメリカ)	(1963)
上代　皓三	(1962)	W. Eugene Knox	(アメリカ)	(1964)
		B.L. Horecker	(アメリカ)	(1964)

て東京大学で開かれ，記念式典にはドイツからFelix教授，ソ連からOparin教授が出席，特別講演を行ない，内外諸学会からの祝辞が伝えられた。また柿内三郎，古武弥四郎，佐々木隆興の3氏の功労に謝意を表するため，会員の醵金による記念品が贈呈された(図9)。10月29日には公開講演会も催された(記念総会記録は「生化学」1956年6月発行特別号に掲載)。

会誌と外字誌　本会機関誌「生化学」は第20巻(1948)以来，原著，綜説，展望，技術，学界消息などを掲載して来たが，毎年3～4冊の不定期の発行をつづけていた。昭和28年(1953)から，これを定期に1年6冊発行するようになり，昭和30年(1955)の第27巻からは月刊に発展し，多数の原著論文を掲載した。

しかし，そのうち原著発表は和文よりも欧文によって海外に周知させる必要が痛感される状況となり，*J. of Biochemistry*への投稿論文の増加が著しくなったので，第37巻(1950)以来本会によって隔月に刊行されて来た*J. of Biochemistry*は，昭和32年(1957)1月からは月刊となった。そして頁数の増加に伴い昭和35年(1960)からは半年6冊をもって1巻とし，翌36年(1961)から大版(B5版)となって，急激な成長を

表3　役員就任者氏名

(A)1949年～1953年

会　長		児玉　桂三(1949-1952)，正宗　一(1953)
会　頭		内野　仙治(1949)，岩崎　憲(1950)，竹田　正次(1952)，左右田徳郎(1953)
顧　問		柿内　三郎，小泉　親彦，古武弥四郎，小松　茂，佐々木隆興，柴田　桂太，前田　鼎(以上1943より)，児玉　桂三(1953より)
理　事	(医)	赤松　茂，有山　登，市原　硬，内野　仙治，上代　皓三，児玉　桂三，島薗　順雄，須田　正巳，広畑　竜造，堀山　一雄，安田　守雄，吉川　春寿
	(理)	赤堀　四郎
	(農)	坂口謹一郎
	(薬)	秋谷　七郎
監　事		伊藤　良二
編集委員		赤松　茂，伊藤四十二，江上不二夫，児玉　桂三，島薗　順雄，清水　多栄，左右田徳郎，住木　諭介，田宮　博，吉川　春寿

(B) 1954年～1965年

会　長		内野　仙治(1954)，赤松　茂(1955)，広畑　竜造(1956)，藤田　秋治(1957)，安田　守雄(1958)，市原　硬(1959)，上代　皓三(1960)，赤堀　四郎(1961)，田宮　博(1962)，島薗　順雄(1963)，古武　弥人(1964)，大島　康義(1965)
顧　問		柿内　三郎，古武弥四郎，佐々木隆興，前田　鼎，児玉　桂三
理　事	(医)	赤松　茂，荒谷　真平，市原　硬，上代　皓三，菊地　吾郎，古武　弥人，島薗　順雄，清水　多栄，須田　正巳，早石　修，広畑　竜造，牧野　堅，正宗　一，三浦　義彰，宮本　璋，八木　國夫，安田　守雄，山崎　三省，山村　雄一，山野　俊雄，吉川　春寿
	(理)	赤堀　四郎，江上不二夫，奥貫　一男，佐藤　了，佐竹　一夫，高宮　篤，田宮　信雄，山宮　博，綴村　雄治，野島　徳吉，服部　静夫，三輪　知雄，渡辺　格
	(農)	大島　康義，小野寺幸之進，小幡弥太郎，片桐　英郎，坂口謹一郎，佐橋　佳一，志村　憲助，住木　諭介，二国　二郎，本田幸一郎，舟橋　三郎，丸尾　文治，満田　久輝，山藤　一雄
	(薬)	秋谷　七郎，伊藤四十二，浮田忠之進，鈴木　友二，水野　伝一
常任理事		島薗　順雄(1954-1962，1964-1965)，浮田忠之進(1963)
監　事		伊藤　良二(1954-5)，上代　皓三(1956-1960)，浮田忠之進(1961-2)，舟橋　三郎(1963-5)

編集委員	赤堀　四郎，赤松　　茂，秋谷　七郎，安藤　鋭郎，伊藤四十二，今堀　和友， 植村定治郎，浮田忠之進，江上不二夫，奥賀　一男，小倉　安之，上代　皓三， 菊地　吾郎，古武　弥人，佐竹　一夫，佐藤　了，島薗　順雄，志村　憲助， 鈴木　友二，住木　諭介，関根　隆光，立花　太郎，田宮　信雄，田宮　博， 次田　皓，津田　恭介，殿村　雄治，二国　二郎，野田　春彦，萩原　文二， 早石　修，船津　勝，舟橋　三郎，牧野　堅，米原　弘，丸尾　文治， 水野　伝一，三浦　義彰，三輪　和雄，八木　國夫，柳田　友道，山川　民夫， 山科　郁男，山村　雄一，吉川　春寿，渡辺　格

示した。B5版となると同時に創刊号以来の表紙のデザインを改めた。昭和36年(1961)6月，児玉桂三博士の古稀祝賀のため*J. of Biochemistry*は記念号を刊行した。児玉博士が長く本会会長として戦中戦後の学会の運営に尽力せられ，*J. of Biochemistry*の本学会による編集発行を実現された功績を記念したのである。

1961年8月モスクワでInternational Commission of Biochemical Editorsの会議が開かれDr. J.T. Edsallからの参加要請があったので，本会の編集委員代表として田宮信雄教授がCorresponding memberとなり出席した。1963年1月からはIUB，IUPAC発表の酵素命名法，略号をできるだけ使用する方針を決定し，投稿者の協力を要請し，投稿論文中の酵素名の検討は田宮信雄教授をわずらわすこととなった。

編集委員は1956年から10名，1958年から15名，1963年から20名となった。また1962年からは古い順に5名ずつ交替することとなった。編集委員会は年4～5回，多くは理事会開催と同じ日に開かれ，編集事務は常任理事が幹事の協力を得て担当していた。幹事として特に長くこの事務にたずさわったのは阿南功一，紺野邦夫の両氏であった。そのうち，投稿論文の増加が著しいので，事務を順調に処理するために欧文誌編集実行委員会が生まれ，また編集規定が検討され初めた。1964年6月には実行委員会で作成した編集規定案が理事会に提出され，理事会は1965年3月成案を得て，編集委員長(任期4年)を置くこととなり，同年8月，田宮博博士に委員長に委嘱した。

*J. of Biochemistry*の刊行には毎年文部省の刊行助成金の補助を受けて来たが，発行部数も増加し，国外頒布数も次第に増加して発展の一路をたどった(**表4**参照)。

和文誌「生化学」は長く常任理事がその編集事務を担当するとともに，編集委員会の委嘱を受けて編集幹事会が投稿論文の検討や企画の立案に当り，問題点を編集委員会で審議するという制度がつづけられて来た。編集幹事会は数人で毎月1回の会議を持ち熱心にその仕事を続けていた。しかし1965年から編集規定の改正により和文誌の編集もまた欧文誌同様実行委員会が論文を編集委員やレフェリーにまわして審査を経るよう改められた。

奨励賞の設定・各種受賞候補者の推薦　昭和29年(1954)左右田教授還暦記念会から

表4　欧文誌(J. of Biochemistry)刊行状況

年	印刷部数	国外頒布数＋交換
1958	1,000	420＋49
1959	1,050	450＋52
1960	1,200	510＋59
1961	1,500	570＋65
1962	1,500	630＋48
1963	1,500	673＋48
1964	1,700	730＋48
1965	2,000	804＋48

138,000円を本会に寄附され，左右田教授の意志に基づき若い生化学者の研究奨励のために使用されたいと申出られた。理事会で協議の結果，昭和30年(1955)4月，日本生化学会奨励賞が設定され，教授の厚意にこたえた。児玉桂三顧問は，その古稀の記念として昭和36年11月500,000円を本会に寄附されたので，これと左右田顧問の寄附金の残金とを以て奨励賞の基金とし，以後はその利息を奨励賞として支出することとなった。昭和38年10月田辺製薬株式会社は以後毎年300,000円を賞金として寄附することを申出たので，これを奨励賞の副賞にあてることとなった。受賞者については年齢を制限し(満35歳以下，医学関係は満37歳以下，昭和40年度からは学部を問わず満40歳以下)，公募による会員の推薦の中から選考委員会で受賞者を選考することとし，毎年1～3名の受賞者がえらばれた。表5に示すとおりである。

学会の仕事としては，奨励賞以外の種々の賞や研究費を本会から推薦する仕事もあって，理事会では松永賞，東洋レーヨン科学技術賞，山路自然科学奨学賞などの推薦のため選考委員会を設けて本会から推薦するものを決定した。

生化学研究連絡委員会への協力　国際生化学連合(IUB)に対応する国内委員会として機能し，生化学関連分野の研究連絡の中核となる組織として，生化学研究連絡委員会が日本学術会議の中に設置されることが必要と認められたので，本会として日本学術会議に対しこの設立を要望した結果，昭和30年(1955)にその実現を見た。本会はこの研究連絡委員会に対する関連学会として委員候補の推薦を行ない，緊密な連繋をとってその活動に寄与した。委員会の最初の主要な活動は，「蛋白質研究所」の設置要望で，それに基づいて1956年10月の学術会議総会に設立案が提出され，1958年共同利用研究所として大阪大学付置の蛋白質研究所が設置されるに至った。また委員会として，1957年国際酵素化学シンポジウムの学術会議主催による開催の実現をはかり，更に1961年頃から第7回国際生化学会議の日本開催の検討を開始した。さらに学術会議の長期研究計画調査委員会に呼応して1961年，生化学の将来計画に関する討議を開始した。

表5　奨励賞受賞者（1955～1965）

(1955)　石本　　真（東大・理）
　硫酸還元菌の生化学的研究
　山川　民夫（東大・伝研）
　赤血球磷質の脂質の生化学的研究
(1956)　該当なし
(1957)　殿村　雄治（北大・触媒研）
　アクトミオシン－ATP系の生化学的研究
　勝沼　信彦（名大・医・生化）
　Co-transformylaseの生合成経路の酵素化学的研究
(1958)　高垣玄吉郎（慶応大・医）
　脳組織におけるグルタミン酸代謝
(1959)　津島　慶三（日医大・生化）
　ヘムタンパク質の構造と機能との相互性に関する研究
(1960)　杉野　幸夫（京大・医・医化）
　酸可溶性デオキシリボシド化合物の研究
　瀬宵　一郎（阪大・理・生物）
　心筋の不溶性チトクローム成分の精製とその諸性質
(1961)　岡崎　令治（名大・理・生物）
　微生物細胞のデオキシヌクレオチドおよびDNA合成系に関する研究
　茅野　春雄（東大・理・動物）
　カイコの卵休眠中に見出された特殊な解糖作用およびその機能
(1962)　加藤　　栄（東大・理・生物化）
　プラストシアニンに関する研究
(1963)　次田　　皓（阪大・タンパク研）
　タバコモザイクウイルスの生化学的研究
　西塚　泰美（京大・医・医化）
　「動物体内におけるトリプトファンからニコチン酸リボヌクレオタイドの生合成に関する研究」ならびにそれに関連した業績
　若林　一彦（東大・医・生化）
　脂肪酸のω-酸化に関する研究
(1964)　山中　健生（阪大・理・生物）
　チトクロームaを欠く緑濃菌の電子伝達系について
　小山　次郎（京大・薬）
　ストレプトリジンS'の生化学的研究
　和田　　博（阪大・医・生化）
　GOTに関する研究
(1965)　浅野　仁子（阪大・分子遺伝）
　リボヌクレアーゼT_1の発見と特異性の決定
　大沢　省三（広島大・原医研）
　リボソーム生合成の研究
　高橋　健治（東大・理・生物化）
　リボヌクレアーゼT_1の化学的構造と機能に関する研究

海外学界との交流　戦後，本学会として外国の学界との交流に意を用いた。*J. of Biochemistry*を本会が復刊することにしたのもその現われであるが，この雑誌と海外の生化学関係の雑誌との交換が行なわれて，交換寄贈された外国の雑誌は，東京大学医学部生化学教室の図書室に保管され，本会の図書として会員の利用に供された。

外国の生化学者を総会の機会に招聘して特別講演を依頼し，国内の研究者と親しく膝を交えて研究連絡の機会を作り，また来日生化学者の講演会を部会主催で開催することも頻繁に行なわれた。わが国の生化学者と特に密接な関係のあった外国のすぐれた生化学者，あるいは総会特別講演に招いた生化学者を，本会の名誉会員に推薦したことも前述のとおりである(表２)。

本会が創立30周年記念会を開いた翌年すなわち1956年４月には米国生化学会が創立50周年記念会をAtlantic Cityで持ったので，島薗教授が出席し，祝賀のメッセージを伝えた。また1964年にはフランス生化学会創立50周年記念会がパリで催され，江上教授が列席して本会のメッセージを伝えた。

昭和32年(1957)10月16～23日，東京および京都において日本学術会議主催のもとに**国際酵素化学シンポジウム**が開かれ，本会の会員の参加も多かった。会長は児玉桂三教授で，東京及び京都に会場を設け，国内から816名以上，海外から99名の参加者があり，演題数103，特別講演はB. Chance，田宮　博，F. Lynen，W.A. Engelhardt諸教授により行われた。

1961年頃から第７回国際生化学会議(1967)を日本で開催する議がおこり，学術会議の生化学研究連絡委員会で検討されはじめたので，全国の生化学者を糾合する本会として，その会議の準備への参加を申し出た。そしてまず赤堀四郎教授を委員長として20名の委員から成る国際生化学会準備委員会を構成し，1964年３月には原案を作成し，生化学研究連絡委員会に提出した。やがて学術会議はこの日本開催を決定し，日本政府の閣議においてもその開催案が承認され，1964年７月ニューヨークにおける第６回国際生化学会議において赤堀四郎教授より正式に次回東京開催を提案，承認され，第７回国際生化学会組織委員会が設置されて準備を進めた。

生化学将来計画の立案　学術研究の将来計画を研究者の手によって作成し，国家の予算の立案にこれを反映させるべきであるという意見が学術会議に盛んとなり，いくつかの学界分野では将来計画を樹立しはじめ，学術会議の中にも長期研究計画調査委員会が組織せられた。

このような情勢において生化学も将来計画を持つべきであるという要望が生化学関係者からおこって来たので，生化学研究連絡委員会においてこれをとりあげ，1961年11月，江上不二夫幹事が中心となって推進する計画が開始された。そこでわが国生化学者の総意に基づき将来計画をたてるためには，日本生化学会がその原案を立案するべきであるという意見のもとに，学会内に生化学将来計画委員会を設置することとなっ

た。1962年4月，医8，理8，農4，薬4の構成で委員を選出し，田宮信雄教授が委員長となり，資料の収集，アンケートによる意見の問合わせを行ない，夏にはそれをまとめて第一次案を作成，9月の理事会で採択されたので，「生化学」誌上に発表，各地において説明会を開き，10月末全国会員参加のシンポジウムをも持った。

続いて1963年には第2期将来計画委員会を組織することとなり，全国的な規模で専門別，年齢別，地域別，国公私立機関別を考慮して学会会員の選挙で委員15名を選んだ。委員長は佐藤了教授で，第一次案の検討を基礎に年度内に第二次案を作成し，そしてこれを「生化学」誌上に発表して会員から広く意見を求め，学術会議に提出した。これは学術会議の“将来計画に関する中間報告II”の中に採録されている。1965年，委員が改選されて第三期の委員会が結成され，志村憲助教授が委員長となって活動を開始した。学術会議においては具体的な第一次5カ年の将来計画を求め，生物科学将来計画の中に生化学の案を織り込むよう考慮せられた。

会員数と会計規模の発展　本会設立後40年間の会員数，会計の規模を表6に示した。空欄は正確な記録を欠いているものである。1965年正会員2,616名，医科系の生化学者が圧倒的に多かった昔に比べ，表7に示すように，理，農，薬系の生化学者の参加が著しく増加したことは注目に値する。これは本会創立当初からの期待の実現として，慶賀すべきことであった。

このような発展に呼応して本学会を任意団体としての組織から社団法人組織に改めるべきであるという意見が有力となり，1962年には理事会として法人化の検討を開始した。それに伴う事務組織の強化のために1965年から中山純一氏を事務長として採用し，また東大医学部生化学教室内に独立した一室を学会事務室として持つこととなった。

表6　日本生化学会会員数，会計

年度	会費納入会員数	会計規模（収入総額）	会誌発行部数	正会員会費
		円		円
1925	368	1,764		7
1926		2,751		7
1927	382	3,755		7
1928				7
1929		4,311		7
1930				7
1931	422			7
1932	440			7
1933	456			7
1934	469			7
1935	472	5,799		7
1936	493			7
1937	521	6,305		7
1938	489	5,282		7
1939	528	5,851		7
1940	564	6,779		7
1941	600	7,445		7
1942	638			7
1943				10
1944				10
1945				10
1946	192	14,336		20
1947	221			50
1948		208,492		300
1949		539,180	1,500	300
1950		1,434,110	1,500	500
1951		1,991,507	1,500	600
1952		2,109,594	1,500	600
1953	791	3,128,524	1,500	600
1954		3,560,565	1,500	600
1955		4,530,504	1,500	1,000
1956		5,867,246	1,500	1,000
1957		5,749,881	1,500	1,000
1958	1,951	6,782,127	2,600	1,000
1959	1,983	7,678,668	2,600	1,000
1960	2,029	9,016,490	2,800	1,000
1961		10,467,749	2,800	1,000
1962	2,410	11,287,529	3,200	1,000
1963	2,572	14,723,919	3,200	1,000
1964	2,973	16,611,969	3,700	1,500
1965	3,116	（半）7,647,752*	3,700	1,500

*1965年に社団法人日本生化学会が設立され，その初年度（1966年度）が10月に発足したので，任意団体としての1965年度は4～9月の半年となった。

表7　正会員の各系分布*

年度	医	理	農	薬	所属不明	計
1927	465	21	21	3	13	523
1954	690	144	92	63	89	1,078
1957	861	348	322	96	123	1,750
1958	856	335	311	119	121	1,742
1959	838	323	232	132	104	1,629
1960	810	344	260	158	158	1,730
1961	789	365	266	179	256	1,855
1962	898	443	335	239	59	1,965
1963	956	471	367	299	93	2,186
1964	1,084	547	418	364	126	2,539
1965	1,042	570	453	411	140	2,616

*この他に団体会員，賛助会員がある。なお1964年度から学生会員(会費1,000円)の制度ができた。

II．社団法人設立以後(1965－1990)

社団法人の設立と運営

日本生化学会の会員数の急激な増加や，会計規模の膨脹にかんがみ，組織を社団法人とすることが望ましく考えられるようになった。法人となれば，日本で開催計画中の国際生化学会議のための寄附金受入れの窓口にもなり得るであろう。1962年７月，理事会は法人化検討を開始し，翌年７月には委員会を設置して準備を進め，1963年定款案がまとまり，設立初年度の役員や予算案を定めて，1964年10月名古屋における生化学会総会の際，設立発起人会を開き，また設立総会を持ち，出席者全員の賛同を得た。こののち鳥薗常任理事が設立代表者となって手続を進め，1965年９月１日付をもって法人が認可されたのである。

認可された定款では，この法人は「社団法人日本生化学会」といい，目的は「会員の研究発表，知識の交換ならびに会員相互間および関連学(協)会の連絡提携の場となり，生化学の進歩普及をはかって学術文化の発展に寄与すること」とし，この目的達成のために次の事業を行うこととしている。

(1) 研究発表会および講演会の開催
(2) 会誌，研究報告および資料の刊行
(3) 内外の関連学(協)会との連絡および協力
(4) 研究の奨励および研究業績の表彰
(5) 研究および調査
(6) その他目的達成のために必要な事業

会員は正会員，学生会員および名誉会員を民法上の社員とし，その他に団体会員，賛助会員をおく。役員は理事20名以上25名以内，監事３名とし，総会で選任され，理事は互選で会長１名，副会長２名および常務理事３名を定めることとし，役員の任期は１年，再任を妨げないこととした。評議員は正会員中から総会において選任され，定数は250名乃至300名。また法人の事務処理のため職員(有給)をおき，会長が任免することとした。通常総会は毎年１回会計年度終了後２カ月以内に開かれ，臨時総会は理事または監事が必要と認めたとき招集できるものとし，総会の成立は会員現在数の1/3以上の出席(書面をもってあらかじめ意見を発表したものを含む)を必要とするとした。会計年度は毎年10月１日に始まり翌年９月30日には終るものとした。

この法人の資産は，(1)設立当初日本生化学会から継承した財産，(2)会費，(3)事業に伴う収入，(4)資産から生ずる果実，(5)寄附金品，その他の収入で，基本財産と運用財産とに分ける。そして従来日本生化学会に属した会員および権利義務の一切はこの法人で継承することとした。事務所は東京大学医学部生化学教室内に置く。そしてこの

定款施行についての細則は理事会の議を経て別に定めることとした。

設立当初の会長赤堀四郎，副会長二国二郎，島薗順雄，常務理事舟橋三郎，浮田忠之進，江上不二夫で，理事総数８名，監事３名。資産として基本財産245万2,544円（内前会長児玉桂三名義30万円，島薗順雄名義27万円，左右田徳郎名義10万7,000円），運用財産137万5,143円が記載されている。1965年（昭和40）10月１日より初まる会計年度を昭和41年度とする。従来の日本生化学会参与（理事を除く）257名は評議員となった。法人の第１回総会は1965年10月19日福岡市九州電力体育館講堂で開かれた（図10）。

この法人の細則は，1966年２月の理事会で議決され次のようなことを定めた。この法人が理事会推薦により毎年会頭を選び，その会頭のもとに毎年１回大会を行うこと，本会に７つの支部（北海道，東北，関東，中部，近畿，中国四国，九州）をおくこと，この法人に対し特に功労のあった外国人を総会の決議により外国人名誉会員とすることができること，日本生化学会奨励賞を設定することなど。そして役員や評議員の選出法，役員の任務，委員会の設置などについても定めている。既に法人認可に先立ち1965年から事務長として中山純一氏が採用され，東大医学部生化学教室内に独立した一室が学会事務室にあてられ，事務運営の強化がはかられた。

法人の定款が1965年に認可されてから，理事数は24名と定められ，評議員会と通常総会は毎年大会の開催期間中に開かれる例となった。1967年には日本生化学会支部規定が定められ，支部役員や経費について定められた。そののち，定款改訂として議決された主な事項は次のとおりである。総会の成立は会員現在数の1/5以上とすること（1967年，旧1/3以上），理事の任期を２年とし，常務理事を６名とすること（1972年，旧１年，３名），常務理事の半数を毎年改選すること（1974年），会計年度を９月１日にはじまり８月31日に終ることとすること（1981年）など。会員の会費の改定は数年毎に議決された。事務所は東京大学医学部生化学教室内から学会センタービル（東京都文京区弥生2－4－16所在）に移ること（1971年），さらに石川ビル（文京区本郷5-25-16）に移ること（1986年）が決定，実施された*。

また役員選出の細則に次期会長制が導入され，副会長１名が次期の会長に昇任することとなった（1986年）。支部は初め細則で定められた７支部に対し北陸支部が加えられて８支部となった（1982年）。

日本生化学会の会章としては創立のとき制定され，会報の表紙に掲げられ，また会員の胸章として頒布せられたものがあったが（図４），その後使用がとだえていた。1985年，創立60周年に際し新らしいシンボルマークが制定され，58巻（1986）以降の雑誌「生化学」の表紙に掲げられている。会員より募集された作品の中から田中亮教授

*事務室は昭和42年（1968年）９月より東大紛争の難を避けて東大内応用微生物研究所，理化学研究所，エーザイ株式会社分室を転々としたのち1971年４月に学会センタービルに落着いた。事務局については中山純一事務長の報告がある（生化学 58(2)288-9(1986)）。

図10．社団法人 日本生化学会第１回総会（1965年10月19日，福岡市九州電力体育館）

の作品が選ばれたものである(図11)。

本会の経理は，毎年の通常総会に於いて前年度の決算報告と新年度の収支予算案が審議承認を受けているが，収支計算書における決算額(収入，支出それぞれの総額)を会計規模として表8に示した。1966年度2,099万円であったものが1975年度には7,595万円，1985年度には19,057万円となり，1990年度は24,729万円となった。

図11　日本生化学会のシンボルマーク
(1985年制定)

会　員

本会の会員のうち，正会員は生化学に関する学識または経験を有する個人とし，学生会員は大学またはこれに準ずる学校に在籍し，生化学または生化学に関係ある学科を修める学生とし，共にこの法人の目的に賛同し，所定の会費年額を納める者となっていて，入会申込があれば格別の資格審査は行われず入会が認められる。社団法人設立以来の会員数および会費年額は表8に示すとおりである。法人発足時3,165人であった会員数が25年の間に11,904人に増加した。会費は正会員，学生会員についてそれぞれ法人発足時1,500円，1,000円であったものが25年後には8,500円，5,000円となった。正会員，学生会員のほかに団体会員および賛助会員があり，その会費も表8に併記してある。

部門別および支部別の会員数の年次推移を表9(A)(B)に示す。医(医歯)部門の会員数が法人設立時に40%であったのが1990年には32%となり，次第に理，薬，農(農工)の会員数の比率が増加している。支部別では会員の分布率に著しい変化は認められない。関東支部に全会員の40%強が属し，近畿支部に20%強が属している。

会員名簿は，1965年，1969年，1976年，1983年，1986年に印刷して会員に配布された。また1986年には英字でDirectory of Membersが印刷に付され，Honorary members(外国人名誉会員)とCouncil members(名誉会員，理事，評議員)の氏名とアドレスが集録されている。

会員のうち名誉会員はこの法人に対し特に功労のあった正会員のうちから総会の議決をもって推薦する者となっているが，内規で会長・会頭をつとめた者，理事在籍6年を経た者その他特に理事会が認めたものとしている。さらに国内で，または国際的に最高の学術的栄誉を受けた者や学士院会員も加えられた(1990年)。名誉会員は会費を納めることを要せず，会誌「生化学」およびJ. of Biochemistryの無料配布を受ける。

外国人名誉会員は，この法人に対し特に功労のあった外国人を総会の決議により推薦するもので，大会の講演者として招聘された外国の生化学者が推薦されることが多い。

表8　日本生化学会会員数，会計規模等の推移(1966～90)

年　度	会員数 正＋学	会計規模 千円	会誌 発行数	会費額 円　　円
昭和41(1966)	2,893＋272	20,990	4,000	正 1,500　団 1,500 学 1,000　賛 10,000
42(1967)	3,281＋330	27,325		正 2,000　団 3,000 学 1,300　賛 15,000
43(1968)	3,492＋361	27,940	5,000	
44(1969)	3,423＋489	26,179		
45(1970)	3,551＋498	31,585		正 2,500 学 1,300
46(1971)	3,623＋529	43,434	6,000	
47(1972)	4,026＋681	39,590		
48(1973)	4,272＋755	49,994		正 3,500　団 5,000 学 2,000　賛 25,000
49(1974)	4,452＋866	62,647	7,000	
50(1975)	4,712＋1,010	75,956		
51(1976)	4,936＋1,082	90,490		正 4,500　団 7,500 学 2,500　賛 30,000
52(1977)	5,380＋1,267	108,504	8,500	
53(1978)	5,707＋1,298	104,986		
54(1979)	6,214＋1,184	122,972		正 5,500　団 10,000 学 3,000　賛 40,000
55(1980)	6,375＋1,215	140,649	9,000	
56(1981)	6,655＋1,275	143,545		
57(1982)	6,967＋1,481	159,000	9,500	正 7,000　団 15,000 学 4,000　賛 50,000
58(1983)	7,296＋1,683	186,974	10,300	
59(1984)	8,110＋1,632	184,630	10,600	
60(1985)	9,179＋1,911	190,571	11,000	
61(1986)	8,893＋1,762	199,341		
62(1987)	9,859＋1,985	225,342	12,000	正 8,500　団 18,000 学 5,000　賛 60,000
63(1988)	9,375＋1,939	231,990		
平成元(1989)	9,734＋2,017	237,371	12,300	
2(1990)	9,949＋1,955	247,299	12,400	

正：正会員，学：学生会員，団：団体会員，賛：賛助会員。
賛助会員はここに記した1口以上の会費を納める者または法人としている。

表 9　専門別および支部別会員数の推移

（A）専門別会員数

年度	医・医歯	理	農・農工	薬	他(不明)	計
1965	1,042 39.8%	570 21.8%	453 17.3%	411 15.7%	140 5.3%	2,616 100%
1987	3,928	2,821	2,204	2,692	280	11,925
1988	3,703	2,808	2,135	2,496	257	11,399
1989	3,810	2,940	2,240	2,623	324	11,900
1990	3,863 32.2%	2,927 24.5%	2,206 18.7%	2,601 21.9%	340 2.7%	11,539 100%

（B）支部別会員数

	北海道	東北	関東	北陸	中部	近畿	中・四国	九州	計
1987	441	451	5,058	308	1,181	2,539	919	986	11,883
1988	431	438	4,866	258	1,129	2,442	881	909	11,354
1989	434	444	5,067	266	1,179	2,528	913	959	11,790
1990	426 3.6%	445 3.7%	5,099 42.7%	261 2.1%	1,213 10.2%	2,596 21.7%	934 7.8%	967 8.1%	11,941 100%

また，本会50周年記念を契機として，本会に永年在籍され，本会の発展に功績のあった満75歳以上の勤続会員を永年会員として推挙し，会費免除とする内規が定められた（1976年，改正1986年）。

表10に名誉会員，表11に外国人名誉会員，表12に永年会員の名簿を掲げた。

表10　日本生化学会名誉会員名簿（推薦年度順，＊印遺贈）

氏名（推薦年度）	氏名（推薦年度）
柿内　三郎（1958）	吉川　春寿（1974）
古武弥四郎（1958）	江上不二夫（1976）
佐々木隆興（1958）	鈴木　友二（1977）
前田　　鼎（1958）	船津　　勝（1978）
児玉　桂三（1958）	松村　義寛（1979）
永山　武美（1958）	須田　正巳（1980）
末吉　雄治（1958）	三浦　義彰（1980）
富田　雅次（1958）	水原　舜爾（1980）
竹田　正次（1958）	成田　耕造（1981）＊
岩崎　　憲（1958）	丸尾　文治（1982）
広畑　竜造（1959）	志村　憲助（1984）
左右田徳郎（1959）	八木　國夫（1984）
堀田　一雄（1959）	今堀　和友（1985）
赤松　　茂（1960）	菊地　吾郎（1985）
藤田　秋治（1960）	早石　　修（1985）
有山　　登（1961）	平井　秀松（1985）
市原　　硯（1961）	水野　伝一（1985）
上代　皓三（1962）	山村　雄一（1986）
安田　守雄（1966）	高木　康敬（1986）
赤堀　四郎（1966）	用宮　信雄（1987）
田宮　　博（1968）	山川　民夫（1987）
大島　康義（1968）	山野　俊雄（1987）
田中　正三（1969）	米山　良昌（1988）
二国　二郎（1970）	佐藤　　了（1988）
島薗　順雄（1971）	中尾　　真（1989）
古武　弥人（1971）	村地　　孝（1990）＊
数野　太郎（1972）	野島　庄七（1990）
奥賀　一男（1972）	江橋　節郎（1990）
浮田忠之進（1972）＊	坂口謹一郎（1990）
神立　　誠（1974）	西塚　泰美（1990）
舟橋　三郎（1974）	杉村　　隆（1990）

表11　外国人名誉会員名簿（ＡＢＣ順）　（カッコ内：国籍と推薦年度）

AMMON, Robert(ドイツ)(1960)
ANFINSEN, Christian B.(アメリカ)(1971)
BERG, Paul(アメリカ)(1978)
BERRIDGE, Mickael, J.(イギリス)(1986)
BERTRAND, Gabriel Émile(フランス)(1954)
BERGSTRÖM, Sune(スエーデン)(1969)
BLOBEL, Günter(アメリカ)(1983)
BLOCH, Konrad E.(アメリカ)(1976)
BRAND, Karl(ドイツ)(1987)
BUTENANDT, Adolf F.J.(ドイツ)(1955)
CANTOR, Charles R.(アメリカ)(1990)
CECH, Thomas R.(アメリカ)(1990)
CHANGEUX, J.P.(フランス)(1985)
COHEN, Philip P.(アメリカ)(1976)
DAVIE, Earl W.(アメリカ)(1986)
EDELMAN, Gerald M.(アメリカ)(1975)
EULER, Hans von(スエーデン)(1958)
EVANS, Herbert M.(アメリカ)(1954)
FELIX, Kurt(ドイツ)(1955)
GREEN, David E.(アメリカ)(1980)
GREENSTEIN, J.P.(アメリカ)(1955)
GUILLEMIN, Roger(アメリカ)(1978)
GUNSALUS, Irwin C.(アメリカ)(1982)
GUSTAFSON, Jan−Åke(スエーデン)(1986)
HANDLER, Philip(アメリカ)(1974)
HASLEWOOD, G.A.D.(イギリス)(1969)
HOGNESS, David S.(アメリカ)(1987)
HOLZER, Helmut(ドイツ)(1975)
HORECKER, Bernard L.(アメリカ)(1964)
KALCKAR, Herman M.(アメリカ)(1988)
KNOX, W. Eugene(アメリカ)(1964)
KORNBERG, Arthur(アメリカ)(1971)
KORNBERG, Sir Hans L.S.(イギリス)(1981)
KOSHLAND, Daniel E. Jr.(アメリカ)(1972)
KUHN, Richard(ドイツ)(1958)
LARDY, Henry A.(アメリカ)(1978)
LARNER. Joseph(アメリカ)(1985)
LEFKOWITZ, Robert J.(アメリカ)(1990)
LIPMANN, Fritz A.(アメリカ)(1960)
LWOFF, André W.(フランス)(1971)
LYNEN, Fritz(ドイツ)(1973)
MEISTER, Alton(アメリカ)(1974)
MITCHELL, Peter(イギリス)(1984)
MONOD, Jacques, L.(フランス)(1965)
NEUBERG, Carl A.(ドイツ)(1952)
NEURATH, Hans(アメリカ)(1977)
OCHOA, Severo(スペイン)(1959)
OPARIN, A.I.(ソ連)(1955)
OVCHINNIKOV, Yu, A.(ソ連)(1975)
PARDEE, Arthur B.(アメリカ)(1965)
PORATH, Jerker(スエーデン)(1970)
POTTER, Van R.(アメリカ)(1963)
PULLMAN, Bernard(フランス)(1977)
RICH, Alexander(アメリカ)(1986)
RODBELL, Martin(アメリカ)(1987)
ROSEMAN, Saul(アメリカ)(1984)
SANGER, Frederick D.(イギリス)(1961)
SCHATZ, Gottfried(スイス)(1985)
SHEMIN, David(アメリカ)(1981)
SKOU, Jens C.(デンマーク)(1988)
SLATER, Edward C.(イギリス)(1973)
SNELL, Esmond E.(アメリカ)(1971)
THEORELL, Axel H.(スエーデン)(1967)
THOMAS, Karl(ドイツ)(1953)
UDENFRIEND, Sidney(アメリカ)(1973)
WATKINS, W.M.(イギリス)(1990)
WIELAND, Heinrich O.(ドイツ)(1952)
WITKOP, Bernhard(アメリカ)(1983)
WOOD, Harland G.(アメリカ)(1981)
WURMSER, R.(フランス)(1963)
YANOFSKY, Charles(アメリカ)(1985)

表12　永年会員名簿（推薦年度順）

勝　　茂　孝	小　川　　巌	坂　口　謹一郎*
近　藤　金　助	渋　谷　真　一	山　崎　三　省
鳥　　信	明　石　修　三	黒　田　嘉一郎
藤　井　暢　三	馬　淵　秀　夫	能　勢　善　嗣
湯　沢　健　児	大　谷　象　平	檜　山　　登

*1990年名誉会員に推薦

役　員

役員の選出は，会員の郵便による直接選挙で理事24名を選ぶことになっていて，3名以上の会員から推薦のあった候補者につき所属部門に関係なく1人1票，無記名の投票が行われる。投票の結果，医(1973年より医・歯)，理，農(1983年より農・工)，薬学のそれぞれの部門別に得票の上位から3名づつを選出し，残りは部門に拘わらず上位のものから順に選出する。理事の任期は1年で，3選を限度とし，65歳以上の会員は候補としないことと定められていたが(1965年)，理事任期後2年間のものは候補としないこととし，任期2年で半数交代の規則が設けられた(1972年)。

会長1名，副会長2名，常務理事(庶務，編集，会計を分担)3名(任期1年，1974年以降は6名，任期2年)は理事の互選によって定める。会長・副会長の任期は1年で，副会長2名のうち1名を会長候補として次期には会長に昇格することとする(1986年度より)。評議員は，満65歳未満の正会員の中から理事会において推薦し，会長指名により総会に諮って選出される。また監事の選出は，3名以上の会員の推薦のあった会員を候補者とし，会員が3名連記して投票する。監事の候補者については重任や年齢に関する制限を加えない。

生化学研究単位が増加し，評議員有資格者が定数300名を超える実状となったので本法人に参与を置く内規を定めた(1974年)。参与は正会員のうち，会員の所属する研究単位を代表する職にある者で，理事会の推薦，会長指名により総会に諮って選出され，満65歳未満の者は評議員候補として有資格者である。

理事会は毎年3回会長が招集することになっていて，そのうち1回は新旧理事合同で開く例になっている。

通常総会は毎年会計年度終了後2カ月以内に会長が招集することになっていて，通常，大会の期間中に開催される。評議員会は随時会長が招集することになっているが通常，大会の期間中に開催される。参与の制度ができてからは，評議員会は参与も列席のもとに開かれることになった。

本会の事業遂行のために編集委員会，各種授賞等選考委員会を常置委員会としてお

き，必要に応じて各種の臨時委員会*をおくことができることになっていて，それぞれの委員は理事会の議決を経て会長が委嘱することと定められている。

この法人は毎年会頭を選んで，その会頭のもとに毎年１回大会を開くことになっているが，会頭は理事会が推薦し，会長が総会に諮って決定することになっている。

表14に法人設立以来の会長，副会長，常務理事，監事の名簿を示す。

現行の役員選出法を検討するために，1987年理事会は臨時委員会として役員制度等検討委員会を設置し，この委員会は現行の役員や科研費審査委員候補選出法を改め，間接投票とする案をまとめて発表した(1988年)。これに対し，会員の意見を求め，将来計画検討委員会による検討も行われ，選出規定の改定実施が計画されている。

*1956～90年の間に設置された臨時委員会は次のとおりである(表13)。

表13　臨時委員会

生化学誌企画委員会	生化学教育委員会
医科生化学教育委員会	OD(オーバードクター)問題検討委員会
PDF・OD問題検討委員会	将来計画委員会
役員制度等検討委員会	将来計画検討委員会
科研費問題検討委員会	集会等検討委員会
FAOB問題検討委員会	国際問題実務委員会
事務所問題検討委員会	事務所移転特別委員会
支部制度検討特別委員会	学術会議改革に関する特別委員会
職員待遇問題小委員会	電算機化問題小委員会
遺伝子操作検討ワークショップ	創立50周年記念事業組織委員会

表14　社団法人日本生化学会役員記録

年度	会長	副会長	常務理事*	監事
1966 昭和41	赤堀　四郎	二国　二郎 島薗　順雄	舟橋　三郎 浮田忠之進 江上不二夫	上代　皓三 高宮　篤 鈴木　友二
1967 昭和42	鈴木　友二	山川　民夫 安藤　鋭郎	浮田忠之進 水野　伝一 高宮　篤	上代　皓三 奥賀　一男 吉川　春寿
1968 昭和43	江上不二夫	山川　民夫 奥賀　一男	水野　伝一 村地　孝 柳田　友道	浮田忠之進 島薗　順雄 早石　修
1969 昭和44	早石　修	山川　民夫 船津　勝	三浦　義彰 佐藤　了 村地　孝	大島　康義 古武　弥人 島薗　順雄
1970 昭和45	奥賀　一男	浮田忠之進 山村　雄一	三浦　義彰 佐藤　了 水野　伝一	二国　二郎 島薗　順雄 吉川　春寿
1971 昭和46	浮田忠之進	山川　民夫 菊地　吾郎	三浦　義彰 佐藤　了 水野　伝一	二国　二郎 島薗　順雄 吉川　春寿
1972 昭和47	船津　勝	山川　民夫 田宮　信雄	水野　伝一 成田　耕造 村地　孝	二国　二郎 島薗　順雄 吉川　春寿
1973 昭和48	山川　民夫	田宮　信雄 今堀　和友	野島　庄七 佐藤　了 村地　孝	島薗　順雄 高宮　篤 舟橋　三郎
1974 昭和49	水野　伝一	石本　真 山野　俊雄	勝沼　信彦・熊岡　熙 三浦　義彰・菊地　吾郎 村地　孝・田宮　信雄	小倉　安之 島薗　順雄 高宮　篤
1975 昭和50	田宮　信雄	山野　俊雄 今堀　和友	熊岡　熙・野島　庄七 菊地　吾郎・佐藤　了 藤田　道也・上代　淑人	小倉　安之 島薗　順雄 高宮　篤
1976 昭和51	今堀　和友	佐藤　了 成田　耕造	野島　庄七・丸尾　文治 西塚　泰美・山科　郁男 上代　淑人・沼　正作	安藤　鋭郎 島薗　順雄 舟橋　三郎
1977 昭和52	丸尾　文治	成田　耕造 高木　康敬	橘　正道・吉川　寛 山科　郁男・大沢　利昭 沼　正作・村地　孝	安藤　鋭郎 島薗　順雄 舟橋　三郎
1978 昭和53	高木　康敬	村地　孝 菊地　吾郎	吉川　寛・岩井　浩一 村松　正実・野崎　光洋 大沢　利昭・水島　昭二	鈴木　友二 能勢　善嗣 吉川　春寿

1979 昭和54	菊地　吾郎	岩井　浩一 上代　淑人	村松　正実・西塚　泰美 藤本大三郎・水島　昭二 香川　靖雄・泉屋　信夫	鈴木　友二 能勢　善嗣 吉川　春寿
1980 昭和55	佐藤　了	上代　淑人 山科　郁男	藤本大三郎・市原　明 西塚　泰美・水上　芳樹 泉屋　信夫・和田　博	島薗　順雄 鈴木　友二 丸尾　文治
1981 昭和56	山科　郁男	沼　正作 野島　庄七	市原　明・二井　将光 水上　茂樹・中川　八郎 和田　博・村地　孝	島薗　順雄 鈴木　友二 丸尾　文治
1982 昭和57	野島　庄七	村地　孝 八木　國夫	二井　将光・広海啓太郎 中川　八郎・大沢　利昭 立木　蔚・永津　俊治	島薗　順雄 鈴木　友二 船津　勝
1983 昭和58	山野　俊雄	八木　國夫 池中　徳治	広海啓太郎・村松　正実 大沢　利昭・永井　克孝 永津　俊治・西塚　泰美	島薗　順雄 鈴木　友二 船津　勝
1984 昭和59	池中　徳治	米山　長昌 上代　淑人	村松　正実・和田　博 永井　克孝・水島　昭二 西塚　泰美・堀尾　武一	今堀　和友 菊地　吾郎 佐藤　了
1985 昭和60	上代　淑人	和田　博 村地　孝	香川　靖雄・市原　明 水島　昭二・大村　恒雄 堀尾　武一・八木　康一	今堀　和友 菊地　吾郎 佐藤　了
1986 昭和61	村地　孝	大村　恒雄 永津　俊治	市原　明・大沢　利昭 坪井　昭三・大島　泰郎 八木　康一・中川　八郎	今堀　和友 高木　康敬 野島　庄七
1987 昭和62	大沢　利昭	永津　俊治 永井　克孝	広海啓太郎・森野　能昌 大島　泰郎・牧田　章 中川　八郎・徳重　正信	今堀　和友 高木　康敬 野島　庄七
1988 昭和63	永井　克孝	村松　正実 沼　正作	森野　能昌・堀尾　武一 牧山　章・左右田健次 徳重　正信・和山　博	佐藤　了 村地　孝 山科　郁男
1989 平成 1	沼　正作	堀尾　武一 市原　明	小沢　高将・石村　巽 左右田健次・水島　昭二 和田　博・香川　靖雄	佐藤　了 村地　孝 山科　郁男
1990 平成 2	市原　明	水島　昭二 永津　俊治	石村　巽・田川　邦夫 名取　俊二・岩永　貞昭 香川　靖雄・水上　茂樹	佐藤　了 田宮　信雄 野島　庄七

*理事総数（常務理事を含む）は24名である。

大会その他の研究発表会

日本生化学会として任意団体時代から年1回開いていた総会は，社団法人発足後は大会として，引き続き毎年秋に会頭主宰のもとに開催されている。

法人発足の1965年の10月には，任意団体時代に会長として定められていた大島康義教授が会頭となり福岡で大会が開催され，参加者1,700名，発表演題数568題であった。翌年の大会は京都で開催され，会頭は田中正三教授であった。その後の大会の記録は表15に示したが，学会の会員数の増加に伴って大会も大きくなり，25年の間に参加者は2.5倍に増加して6,000人となり，演題数は4倍を超え2,400題以上となった。大会では一般演題のほか，シンポジウムや特別講演も多く，またポスターセッションに力を注いだ大会もあった。外国人を招いて特別講演を依頼することも盛んに行われた。FAOBの発表論文がポスターセッションに組込まれ(1977年)，また日英合同シンポジウムがプログラムに含まれたこともあった(1982年)。

第38回大会(1965年)から第63回大会(1990年)に至る大会の記録は表15にまとめて示した。また大会におけるシンポジウムの題を別表1に列記して示した。

本会の全国8地域の支部はそれぞれ例会やシンポジウムを開いている。会誌「生化学」にその予告や記録，抄録が掲載されている。

本会は日本医学会に評議員や連絡委員を出していて，4年に1回開催される日本医学会総会で生化学分科会のために分科会長を推薦している。法人設立以前の分科会長は表1付表に示したが，設立以後は表15付表に示すとおりである。

なお1978年度より本会に各種学術集会補助制度が設けられ，主として各支部(シンポジウム)および生化学若い研究者の会(夏の学校)などに経費の補助を行っている。

1975年(昭和50年)に本会の創立50周年を迎え，その記念式典が国立教育会館虎の門ホールで，11月4日に行われ，11月5日，6日には東京大学の薬学部講堂，理学部講堂でシンポジウムが開催された。今堀和友会長の挨拶に続いて文部大臣，日本学術会議会長，学術振興会会長，日本化学会会長の祝辞があり，国際生化学連合のメッセージ，フランス，西ドイツ，東ドイツ，イスラエル，オランダ，アメリカの生化学会，ソ連生化学連合，台湾中央研究院からの祝辞の伝達があり，次に本会創立以来の功労者(名誉会員24名，永年会員16名，永年勤続事務局員3名)の表彰が行われた。続いてOchoa，Edelman，早石3教授の記念講演が行われ，夕6～8時懇親会(カクテル)が東京プリンスホテルで開かれた。翌11月5日，6日に東京大学を会場として行われたシンポジウムはCellular recognition and molecular immunology，Gene expression，Metabolic regulation，Energy metabolism and biomembranesの4題であった。創立50周年記念としては，そのほか座談会が催され，追憶記事が執筆された(これらの記録や記事は「生化学」47巻9号(1975)，48巻3号，4号(1976)に掲載)。

1985年(昭和60年)創立60周年に際しては，上代淑人会長のもと，記念事業として

表15　日本生化学会大会記録

回数	年，月／日	場所	会頭（副会頭）	出席者数	シンポジウム題数*［特別・招待講演数］	演題数（一般演題，シンポジウム共）
38	1965.10/17-20	福岡（九大）	大島　康義	1,700	4[3]	568
39	1966.11/25-28	京都（同志社大）	田中　正三	2,393	4[2]	584
40	1967.11/3-6	堺（阪府大）	二国　二郎	2,713	4[2]	697
41	1968.10/28-31	東京（老溪会館ほか）	吉川　春寿	2,906	4[1]	690
42	1969.10/6-9	広島（広大）	数野　太郎	1,846	4[3]	681
43	1970.11/8-11	東京（東大教養）	神立　誠	2,632	6[1]	795
44	1971.10/4-7	仙台（東北大）	志村　憲助	2,291	5[3]	856
45	1972.11/23-26	横浜（慶大日吉）	関田　潔	2,685	7[2]	917
46	1973.9/27-30	名古屋（名古屋観光ホテル）	八木　國夫	2,721	3[3]	1,014
47	1974.10/9-12	岡山（岡大）	水原　舜爾	2,837	7[2]	1,116
48	1975.10/13-16	福岡（九大）	船津　勝	2,822	12[2]	1,068
49	1976.9/1-4	札幌（北大）	平井　秀松	2,809	13[3]	1,349
50	1977.10/13-16	東京（東大教養）	水野　伝一	3,528	17[3]	1,192
51	1978.11/27-31	京都（京都会館ほか）	早石　修	3,636	33[9]	1,268
52	1979.10/6-9	東京（サンケイ会館ほか）	松村　義寛	3,837	1[1]	1,490
53	1980.10/13-16	東京（東大教養）	山川　民夫（今堀　和友）	4,307	[6]**	1,561
54	1981.9/28-10/1	仙台（東北大教養）	菊地　吾郎	3,661	4[4]	1,748
55	1982.10/10-13	大阪（阪大教養）	山野　俊雄	4,741	10[3]	1,890
56	1983.9/29-10/2	福岡（福岡大）	高木　康敬（泉屋　信夫）	4,352	8[5]***	1,972*
57	1984.10/6-9	東京（東大教養）	野島　庄七	5,372	12[4]	1,979
58	1985.9/26-29	仙台（東北大教養）	田宮　信雄	4,542	14[13]	2,111
59	1986.9/20-23	西宮（関西学院）	佐藤　了	5,156	26[4]	2,133
60	1987.10/12-15	金沢（金沢大教養）	米山　良昌（久野　滋）	5,232	17[6]	2,458
61	1988.10/3-6	東京（東大教養）	中尾　真	6,150	3[4]****	2,335
62	1989.11/3-6	京都（京産大）	山科　郁男	5,489	7	2,407
63	1990.9/12-15	大阪（阪学大）	和田　博（田川　邦夫）	6,101	26[5]	2,642

*シンポジウムはミニシンポジウムを含む。
**他に奨励賞受賞者講演41題あり。
***他にワークショップ3題あり。
****他にモーニングレクチャー13題あり。

表15付　日本医学会生化学分科会記録

回数	年（4月）		場所	分科会長
第17回	昭和42	1967	名古屋	明石修三
18	46	1971	東京	牧野堅
19	50	1975	京都	能勢善嗣
20	54	1979	東京	三浦義彰
21	58	1983	大阪	萩原文二
22	62	1987	東京	浅田敏雄

第58回大会（仙台）の際に記念特別講演（沼正作，佐藤了両教授），記念出版（「続生化学実験講座」および「生化学用語辞典」），「生化学」誌上に創立者柿内三郎先生伝の掲載，先輩29氏執筆の回顧随想の掲載（生化学57(10)1403～31(1985)）と，現役，中堅会員による過去10年間の進歩と未来への展望についての座談会の開催（生化学58(2)69～91，(4)257～276(1986)），本会シンボルマークの制定（前述）などが行われた。

和文誌・英文誌および専門書の刊行

本学会が法人設立前から編集発行していた雑誌「生化学」および「Journal of Biochemistry」は法人設立後も引き続き刊行され，内容も充実し，発行部数も増加して今日に至っている。編集のためには常務理事1名（1974年度以降は2名）が編集理事となり，常置委員会として編集委員会を設置している。

Journal of Biochemistry編集のためには，編集委員長1名，編集委員約20名のほかに，常任論文審査員12名，そののち増加して約35名を置いている。これらは編集委員会に於いて選出され，理事会の承認を経て会長が委嘱する。委員長は任期4年で重任を妨げないものとし，委員は任期2年で毎年1/2が交替する。委員長のもとに幹事を置いて事務処理に当ることとし，実務委員会を置いたこともあるが，1977年から編集幹事4～5名が委員長を補佐することとなった。製作は1966年以来東大出版会，続いて学会誌刊行センターに依嘱しており，事務を扱う場所は，学会事務局となっているが，1970～2年には実務委員会が大阪で持たれた。歴代の編集委員長は表16に示すとおりである。

Journal of Biochemistry*は1950年，第37巻以来本学会により刊行され菊版の創刊以来の体裁が継承されてきたが，1960年から半年6冊をもって1巻とし，1961年からB5版となって創刊号以来の表紙のデザインが改められていた。10年を経て1971年の68巻から表紙を色刷でJBの文字を大きくあしらったデザインとし，さらに83巻

*The Journal of Biochemistry, SSN 0021-924X

(1978年)からデザインを少しく変え，103巻(1988年)からはレターサイズの大きな版に改めた。年1巻の刊行が続けられ，1990年には107，108巻が出版された。内容は専ら英文の原著論文で，Regular PapersとCommunicationsの2種に分ち，Reviewの掲載も時に行われる。投稿規定は必要に応じて改定されたものが用いられており，1973年に大改訂を行った。この雑誌の刊行は発展の一途をたどっていて，1965年以来の頁数，論文数，配布部数は表17のとおりである。海外への頒布部数は日本の学術雑誌中第1位となり(1984年)，文部省の刊行助成金も毎年2,000万円を超えている。

和文誌「生化学」は本会の機関誌として全会員に配布されるものであって，編集担当理事のもと編集委員会の委嘱を受けた編集幹事会がその編集の衝に当っていたが，1965年からは実行委員会を置いて論文を編集委員や論文審査員にまわして審査を行うこととなった。さらに1978年度からは誌面の刷新が計画され，和文誌企画委員会が組織され，企画委員長1名，委員16名(その後20名に増加)が編集に当ることとなった。企画委員長の名簿も表16に示してある。

和文誌「生化学*」は社団法人発足の1965年は第38巻で，その後毎月発行され，1年12号を以て1巻としている。内容は第48巻までは原著あるいは正論文，綜説，技術，短報の各欄があり，大会抄録，支部例会抄録，英文誌の和文抄録，書評，新報が掲載されていた。第48巻(1976)からは原著，正論文の掲載がなくなり，本会創立50周年を契機として誌面を会員が親しみをもって読むような雑誌に刷新することが計画され，企画委員会の企画のもと，

人—仕事と意見，私の歩んだ道，学問の風景—私の仕事とその周辺，評伝，対談，座談会，論壇，生化学のあゆみ，総説，みにれびゅう，びゅうぽいんと，講座，テクニカルノート，新技術紹介，学会のうちそと，てがみ，交叉点，ひろば，支部の

表16　歴代編集委員長，企画委員長

編集委員長	期間	企画委員長	期間
田宮　博*	1966～70	山川民夫	1976～77
奥貫一男	1970～72	今堀和友	1978～81
吉川春寿	1973～76	永井克孝	1982～
山川民夫	1977～82		
野島庄七	1983～87		
山科郁男	1988～		

*田宮博氏は在任中Editor-in-Chiefと称されることを固辞された。

*SEIKAGAKU。第44巻(1972)まではThe Journal of Japanese Biochemical Societyの英語名が附記されていた。ISSN 00371017。

表17　Journal of Biochemistry発行配布状況

年度	巻	頁数	論文数	配布部数				
				個人	団体	商社扱	交換等	合計
1965	58，59	1,434	204	618	135	828	70	1,651
1968	63，64	1,721	240	661	291*	1,000	78	2,030
1971	69，70	2,218	260	650	329	1,160	70	2,209
1974	75，76	2,782	334	696	351	1,364	57	2,468
1977	81，82	3,852	455	725	365	1,280	180	2,550
1980	87，88	3,869	447	696	372	1,350	162	2,580
1983	93，94	3,934	456	723	365	1,405	177	2,670
1986	99,100	3,664	408	681	396	1,410	163	2,650
1989	105,106	2,316**	389	673	346	1,396	235	2,650

*この年より団体の中に賛助会員を含める。
**1987年までB5版であったものを，1988年からレターサイズ版に改めた。

ページ，研究室だより，北から南から，ぱいおふぉーらむ，ことばのページ，賛助会員のページ，著者寸描

などの欄が設けられた。

学界ニュースとして動物学会，植物学会と本学会共同で「生物科学ニュース」が編集され，1971年12月から本誌に挿入，1979年から巻末綴込が続けられたが，1982年12月をもって中止された。またFAOB Newsのコピーが1982年から掲載されるようになった。

雑誌はB5版で，表紙は黄色で目次入りから，代赭色の主要目次入りに変り(44巻，1972)，51巻(1979)から毎年色を変えるようになり，58巻(1986)からは左下にシンボルマークをあしらった新しいデザインに改められている。

和文誌やJournal of Biochemistryは発刊当時は広告を一切掲載しない方針が貫かれていたが，戦後は広告掲載の方針に変じ，次第にその量が増して大きな収入源と認められるようになった。

日本生化学会が企画し刊行した図書として「生化学実験講座」全16巻30冊＋別巻総索引(1974～7年)があり，その発行は本会創立50周年の記念事業の一つであった。その10年後には60周年記念事業として続編全8巻16冊を刊行した(1985～7年)。これらの刊行は生化学全般をカバーしながら，基礎的な実験法をそれぞれの専門家が解説したもので，生化学の研究の普及発展に寄与するところが大であった。その後バイオサイエンスやバイオテクノロジーの進歩による生化学実験法の変貌に応じて，1989年には新たに「新生化学実験講座」20巻36冊の刊行を開始した。以上の実験講座何れも編

集は日本生化学会で，編集委員会が設けられ，前二者の編集委員長山川民夫教授，副委員長今堀和友教授で，第3のものは委員長村松正実教授，副委員長永井克孝教授であった。いずれも発行は株式会社東京化学同人である。

生化学の実験法と共に，実験の計画・実施に必要なデータが生化学の研究者により要望せられたので，日本生化学会は1979年その編集刊行を行うこととし，委員長山川民夫教授，副委員長今堀和友教授のもとに10名の委員より成る編集委員会を設け，学会の多数の理事や評議員の協力のもとに「生化学データブック」を刊行した。第Ⅰ分冊は生体物質の諸性質，生体の組成でB5版 1,924ページ(1979年11月発行)，第Ⅱ分冊は代謝と栄養，遺伝・微生物・細胞・免疫，生化学的技術を内容とし，B5版 1,350ページ(1980年6月発行)で別冊として代謝マップ一経路と調節，B4版 157ページ(1980年6月発行)を加えた大冊であった。この「生化学データブック」は後に縮小版も発行された(1981年)。これらも株式会社東京化学同人の発行であった。

本会の創立60周年の記念事業のひとつとして教育委員会(委員長香川靖雄教授)の編纂による「英和・和英生化学用語辞典」が刊行された。日本における生化学用語の整備をはかったもので，本会としてはかつて昭和16年(1941)に編纂し会員に配布した「第一次生化学語彙」以来の企画である。1987年10月に発行され，A5版 524ページ，発行者は株式会社東京化学同人である。この計画実施のためには財団法人内藤記念科学振興財団の助成もあった。

研究・教育の奨励・推進と表彰

奨励賞　日本生化学会奨励賞は昭和30年(1955)以来，毎年の授与が続けられている。社団法人設立後は細則により定められ，研究業績の主要な部分が国内で行われたもので，受賞者はその年10月1日に40歳未満の本会会員に限ることとし，毎年3件，1977年からは5件以下で，副賞として田辺製薬株式会社寄贈の賞金が贈られる。受賞者は本会の各種授賞等選考委員会の選考により決定し，大会に於いて授与式が行われ，続いて受賞講演が行われるのを例とした。別表2に1966年以降の受賞者の記録を示す。

各種受賞および助成金受領候補者の推薦　各種の学術賞や研究助成を受ける候補者の推薦依頼に応じて本会はこれを全会員に公示すると共に，常置の各種授賞等選考委員会において選考の上，推薦を行っている。上記の本学会奨励賞の受賞者選考もこの委員会で行う。委員は12名以下で理事会の議決を経て会長が委嘱し，任期1年で，4年を超えない重任が認められている。委員の互選で委員長が選出される。

科学研究費補助金の配分審査委員候補者の推薦　この委員の候補者を日本学術会議に推薦するために，1970年から，分科細目(物質生物化学，代謝生物化学，一般医化学，病態医化学)別に会員の推薦にもとずく候補者リストについて，会員全員の3名連記の投票による選挙が行われ，その結果にもとずいて推薦が行われるようになった。

将来計画委員会　1962年に設置されたこの委員会は，第3期委員会が1965年志村憲助教授を委員長として学術会議の中間報告Ⅱにもとずき，第1次5カ年計画の立案を小委員会で行なった。その計画では大学学部や研究所などの生化部門の基盤強化，即ち研究費増額，講座部門の増設に重点をおき，なお流動的研究やセンターの整備を求めた。1968年第5期委員会では高宮篤教授を委員長として学部にまたがる大学院教育制度「生化学研究教育協議会」が提案され，続いて科学研究費問題の改革(1970)や生化学研究機構(1971)についての報告が行われ，1972年第9期委員会をもって発展的にその組織を解消した。そののち1988年に将来計画検討委員会が設置されたが，この委員会は本学会の役員選出問題などを取り扱っている。

生化学教育委員会　国際生化学連合(IUB)の教育委員会に呼応して本会の中に教育委員会が設置され，香川靖雄教授を委員長として1986年に発足し，翌年5月にはIUB生化学教育ワークショップを自治医科大学において開催した。日本生化学会編「英和・和英生化学用語辞典」もこの委員会によって編纂された(1987)。

医科生化学教育委員会　大学医学部(医科大学)の生化学教育の充実をはかるため1956年全国の生化学(医化学)担当教授が医科生化学教育協議会を結成し，生化学会総会の際に毎年会合を催し，医科生化学教育のための実習費の増額，第二講座の設置の建議要望などを行ってきた。しかし日本生化学会が医理農薬諸分科にまたがる学会であるため医学部のみの問題を扱うこの協議会を生化学会内の組織とすることを差控えていたのであったが，1969年になって日本生化学会の中に臨時委員会として医科生化学教育委員会が設置されることとなった。委員の選出法も定められ，運営費には日本医学会より寄贈される年額8万円(1986年より20万円)の助成金を充当することになった。1971年には日本医学会生化学分科会として医科の生化学教育に関するシンポジウムが開かれ，アンケート調査なども行われ，1974年には生化学第2講座設置推進についての建議が行われ，また1983年には生化学学生実習設備改善に関する要望書が提出された。

オーバードクター問題委員会　オーバードクターの問題が若い生化学者にとり切実な問題となり，日本の生化学の発展上緊急な処置を要する事態となったので，本会は1972年オーバードクター問題委員会を組織してこの問題についてのアンケート調査，並びに報告や討議を行ない，1974年には水野会長名をもって越智学術会議会長宛この問題に関する申入れを行ない，さらに1978年要望書を作成して文部省，日本学術会議，日本学術振興会などに提出し陳情を行なった。

この運動がある程度の効果をおさめたのちもPDF/OD(ポストドクトラルフェロー・オーバードクター)問題検討委員会として活動し，1987年にはアンケート調査などを行ってその結果を報告した。

内外の関連学協会との連絡・協力

本学会は国内で開催されるシンポジウム，セミナール，討論会，ワークショップ，講演会などを他の学会と共催し，また後援し，その予告を会誌「生化学」の本会記事欄に掲載して会員に公示している。

日本学術会議には生化学研究連絡委員会が設けられ，本会はその基礎となる学会として協力し，毎期本学会から委員候補の推薦が行われてきた。学術会議では生化学研究連絡委員会のほか，分子生物学，地球化学宇宙化学，生理科学，微生物学などの研究連絡委員会にも本会から委員候補を推薦している。また学術会議の改革に関しては委員会を設けて協議し，改革後昭和62年(1987)には学術研究団体登録を行い，7部生理科学の中の生化学に属する学会として，会員候補者1名，会員推薦人(予備)3名を推薦している。

日本医学会に対しては，その中の生化学分科会として本学会が加入しており，評議員，連絡委員を出し，また4年毎の総会に参加して生化学分科会長を出している(表15付表)。

国際生化学連合(International Union of Biochemistry, IUB)には1952年から日本が加盟しているが，その窓口は日本学術会議の生化学研究連絡委員会である。IUBの中の生化学雑誌編集者委員会(International Commission of Biochemical Editors)には1961年以来参加してきたが，1969年その改組が行われ，世界の代表的生化学雑誌11誌の代表者によりCEB(Commission of Editors of Biochemical Journals)が構成されることとなり，本会もこれに代表者を出して参加している。IUBの中の生化学教育委員会に呼応して本会に設置された教育委員会が1986年日本で生化学教育ワークショップを開催したことは前に記した。

本会が母体となって1967年東京において学術会議主催のもとに**第7回国際生化学会議**が開催された。会長赤堀四郎，副会長二国二郎，島薗順雄，組織委員長島薗順雄で*，会期は8月19日～25日，開会式，レセプションは武道館，研究発表は東京プリンスホテルとニューオータニで7つの大会場と4つの小会場に分れて催され，参加者は国内会員1,899名(内準会員42名)，国外会員2,607名(内準会員523名)であった。シンポジウムの題は，(1) Structure and Function of Biopolymers, (2) Biosynthesis of Biopolymers, (3) Mechanism of Enzyme Action, (4) Cellular Organization, (5) Metabolic Control, (6) Bioenergetics, (7) Biochemistry of Morphogenesisであった。

1970年ころからアジアオセアニア生化学者連合(Federation of Asian and

*部会長は吉川春寿(企画)，江上不二夫(運営)，早石　修(学術)，舟橋三郎(財務)，幹事は江上不二夫(General Secretnry)，三浦義彰，浮田忠之進，田宮信雄および学術会議の調査課長，会計課長であった。

Oceanian Biochemists, FAOB)設立の議がおこり，1971年その設立準備委員会が設けられるに当り日本側委員として村地孝教授を選出し，1972年8月1日をもって設立が実現した。日本，オーストラリア，インドの3生化学会の連合により組織せられ，本会は分担金年額310ドルを支払うこととなった。その後この連合への加盟国は増加して1990年現在17カ国となり，本会の分担金も増加して4,620ドルとなっている。

その事業としてFAOB Newsが発行され，そのコピーは雑誌「生化学」に1984年より掲載されている。国際シンポジウムの共催も行われた(1973)。第1回のアジアオセアニア国際会議は1977年，名古屋に於いて開催された。これは10月10日～12日，名古屋観光ホテルに於いて八木國夫会頭のもと開催され，総会講演，特別講演があり，シンポジウムは(A) Biochemical Aspects of Nutritionと(B) Structure and Function of Biomembranesの2題で，その他の一般演題は第50回日本生化学会大会(東京)のポスター形式の発表に組入れられた。日本を除く加盟地域からの参加者62名(演題数41)，その他の国外より2名(演題数2)，日本からの参加者310名(演題数26)であった(生化学50,598～606(1978))に記録掲載)。

そのほか外国の生化学会との連絡も多く，1980年には英国生化学会から日英合同学会の申入れがあり，英国生化学会の会議に日本から数名の代表団を派遣し，翌年日本の生化学会大会には日英合同シンポジウムを開いた。1986年英国の生化学会創立75周年記念式には祝辞を西塚泰美教授が伝達し，翌年韓国生化学会創立20周年記念式にも祝辞を送った。

1978年から本学会に国際交流基金を設け，会員の国際会議への参加に対し旅費の援助を行なっている。

生化学若い研究者の会は本学会の外の組織であるが，本学会との連絡が密で，ニュースの発行，夏の学校の開催，小委員会による問題討議などを行っている。将来計画，研究体制，科研費問題などについての討議が行われ，その結果にもとずく要請が本学会に提出された。

付記：本編「任意団体の時代」の記述は略々

島薗順雄：日本生化学会40年の歩み，生化学38 (4) 149-60 (1966)［島薗順雄著：還暦の記録 p.33～57 (1987)に再録］

に従った。写真の蒐集は赤松暢教授(聖マリアンナ医大)の協力を得，「社団法人設立以後」の資料の蒐集は中山純一氏(日本生化学会事務長)の協力を得た。ここに記して謝意を表します。

別表1．日本生化学会大会シンポジウム題(1965－1990)

大会回数(年)	シンポジウム題（ミニシンポジウム，コロキウム，ワークショップを除く）
38 (1665)	○核酸の生化学○薬物異物の代謝○生物活性ペプチド○生体膜の構造と機能
39 (1966)	○ウイルスと細胞の相互作用の生化学○補（助）酵素の生合成○アミノ糖の生化学○臓器固有性の生化学
40 (1967)	○ホルモンの作用と生理機能○デンプンおよびグリコーゲンの生化学○ガンの生化学—調節機構の非可逆的変換とガン○石油生化学
41 (1968)	○脂質の機能○細胞分裂の生化学○動物の非解糖系糖質代謝○エネルギー変換機構としてのATPase
42 (1969)	○細胞内構造体および膜のBiogenesis○高等動物の酵素誘導と代謝応答性○リボゾーム○ステロイドの生物学的転換
43 (1970)	○DNA生合成○tRNA○RNA生合成○C－P化合物○癌の分子生物学のトピックス○蛋白質生合成
44 (1971)	○タンパク質の酵素的修飾と代謝調節○抗体と抗体産生反応の特異性○プロテアーゼの活性と生理的意義○複合糖質の生化学○発生・分化の生化学
45 (1972)	○ガンと核酸○酸素添加酵素とその生理的意義○結合組織の生化学○脳の生化学○タンパク質のアミノ酸排列決定に関する諸問題○Cyclic AMP○日本の生化学と世界の生化学
46 (1973)	○還元型フラビンの反応性○生体高分子生合成の機構○プテリジンおよび関連化合物の生化学
47 (1974)	○含硫アミノ酸およびペプチド代謝○動物における生体内酵素量の調節○胆汁酸およびステロイドホルモンの生合成と代謝○ポリアミン○光合成研究の問題点○ポリADPリボースとタンパク質のADPリボシル化に関する諸問題○代謝病
48 (1975)	○核酸の生合成—酵素による核酸構造の鑑別とその役割を中心として○クロマチンの生化学○生理活性ペプチド○細胞内プロテアーゼ○細胞内における酵素の分子形態形成と機能発現○プロテイナーゼインヒビターの構造ならびに生理的役割○代謝リズムの生理化学○迅速反応測定の生化学への応用○細胞内小器官の形成機構○チトクロームP－450の機能と分子的性質○複合糖質○糖代謝の制御機構
49 (1976)	○薬理作用への生化学的アプローチ○Restriction enzymeの特性○生体膜と脂質（イ）膜機能と脂質，（ロ）脂質代謝に関連する複合酵素系，（ハ）膜とリン脂質代謝○無機物の生物的酸化還元○赤血球の病態生化学○真核細胞に於けるメッセンジャーRNAの合成と代謝○アンモニアの終末代謝ならびに再利用系とその調節○ヘム蛋白質の構造と機能○アフィニティクロマトグラフィーの新しい応用○ガンにおける形質発現の調節の異常○リポパーオキサイドの生成
50 (1977)	○遺伝子の機能○細胞周期の生化学○新物質の発見とそれに続く研究の発展○微生物の代謝機能と代謝産物 I 微生物の酵素と代謝産物，II微生物の代謝能の開発○神経生物学○収縮性タンパク質○プロテアーゼと生体制御○高分子の高次構造と機能発現○オルガネラの形成機構 I 細菌細胞膜系の構造と機能形成，II細胞分化とオルガネラ形成○細胞膜受容体と情報伝達機構○代謝病と分子病○発ガン物質と変異原物質ならびに発ガンと変異
52 (1979)	○遺伝子の生化学－遺伝子操作によるその進歩
54 (1981)	○遺伝子の構造と機能発現○ヘム酵素と酸素分子の活性化○カルシウムイオンによる細胞機能調節○イソプレノイドの生化学
55 (1982)	○チトクロムP-450：最近の進歩○プロテアーゼによる限定分解と生物学的意義○真核生物遺伝子の構造と進化○細胞骨格からみたアクチン○タンパク質の生体膜透過機構○ガン化のしくみ

56 (1983)	○細胞表面識別と糖タンパク質○カテコラミンの動態と作用機構○細胞内タンパク質の分解とその調節○酵素の細胞内局在化機構—ミトコンドリアを中心として○活性酵素の生成・消去・作用○タンパク質のcovalent modificationによる生体機能の調節○タンパク毒素のレセプターと毒性発現○遺伝子の発現と形質転換
57 (1984)	○RNA生合成におけるプロセシング○アラキドン酸カスケード—その酵素と代謝産物○がんの生化学—遺伝子から間質まで○イオン輸送性ATPases○解糖・糖新生のin vivoにおける調節○個体発生・系統発生からみた活性ペプチド○免疫調節物質○光合成初期過程に関与するタンパク質と葉緑体遺伝子○真核生物における遺伝子の発現調節○コンピューターグラフィックスによる生体分子の立体構造表示と分子設計○複合脂質の活性発現とその機構○タンパク質の機能と動的高次構造
58 (1985)	○細胞増殖の制御機構○光受容タンパク質—その生理と生化学○炎症反応発現のメカニズム○ヒト遺伝子研究の新しい展開○血液凝固・線溶機構の増幅と制御○チトクロムP-450—生物学・遺伝学○RNAの生化学における新たな展開○動物性毒タンパクの構造と機能○複合糖質—構造・代謝・機能の相関○細胞分化の誘導と決定—分子レベルのアプローチ○心拍調節の生理化学○タンパク質の膜透過と局在性の分子機構○免疫学的認識分子の構造と機能○細胞機能調節におけるタンパク質のリン酸化・脱リン酸化
59 (1986)	○細胞膜における情報伝達○細胞骨格—構造・機能から遺伝子まで○真核細胞における遺伝子発現の調節機構○プロテアーゼとプロテアーゼインヒビター—遺伝子から分子病理まで○チトクロムP-450—現状と展望○神経生物学—最近の進歩および今後の展望
60 (1987)	○タンパク質の修飾とその細胞生化学的意義○生体組織における酸素代謝の多様性とその総合的理解○質量分析：生化学における新しい展開○染色体の構築と細胞周期○生化学教育—分子生物学の教育○イオンシグナリングの分子機構○白血球の活性酸素生成機構○代謝・免疫に及ぼす和漢薬成分の生化学的作用○RNAゲノムの構造と発現○神経系の分化・成長の分子機構○動物ペルオキシゾームの機能・生合成・病態○成人病解明の新展開○遺伝子発現の調節：転写制御タンパク質の役割○無脊椎動物の生体防御機構○フラビン酵素の機能発現と活性調節の機構○分子レベルにおける代謝疾患研究の進歩○ホルモンの遺伝子レベルでの作用機構
61 (1988)	○細胞外マトリックス研究の新展開○これからのニューロサイエンス—分子レベルにおける研究の幕あけ○H^+-ATPase研究の新展開
62 (1989)	○がん遺伝子発現とがん抗原○アラキドン酸カスケードの分子細胞学的アプローチ○細胞におけるタンパク質の小胞輸送と選別○神経生物学の最近の進展—構造・機能・調節○抗がん剤耐性の分子機構○遺伝病遺伝子の追究—ヒトと動物モデル○酵素機能発現機構の分子論的研究の新展開
63 (1990)	○細胞内シグナル遺伝系と遺伝子発現○ヒト遺伝子解析—ゲノムプロジェクトを考える○RNAの新しい機能○ミトコンドリアDNA○細胞周期とその制御○遺伝子発現における制御タンパク因子・シグナル核酸のトポロジー変換の効果○タンパク質工学の発展とその高度利用○タンパク質の膜透過ならびに細胞内輸送の分子機構○機能性タンパク質の分子認識機構○Glycobiologyの展開○生物情報の認識・発現におけるプロテアーゼおよびプロテアーゼインヒビターの役割○細胞マトリックスによる細胞増殖・分化の制御○超分子構造とその構築機構○膜タンパク質のアンカーとしてのホスファチジルイノシトール○細胞内情報伝達調節の場としての細胞骨格系○筋収縮の分子機構○グリア細胞の生化学○増殖因子○生体アミンの分子細胞生理学：生理と病理○神経生化学の新しい方法○化学発癌過程と薬物代謝・抱合系酵素の発現○小腸をめぐる最近の話題。［循環器生化学］○虚血とオキシラジカル○循環器系の調節因子○血管内皮細胞：その新しい役割○カルシウムと細胞機能調節

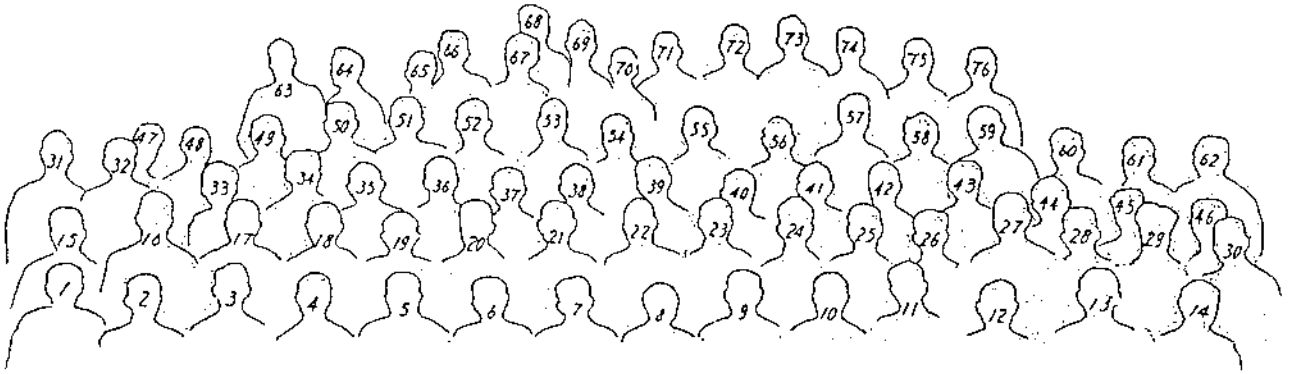
別表 2　日本生化学会奨励賞受賞者(1965～1990)(同年度内は氏名五十音順)

年	氏　名	(所　属)	業　績
1965	浅野　仁子	(阪大分子遺)	リボヌクレアーゼT_1の発見と特異性の決定
	大沢　省三	(広大原医研)	リボソーム生合成の研究
	高橋　健治	(東　大　理)	リボヌクレアーゼT_1の化学的構造と機能に関する研究
1966	中村　隆雄	(東　大　理)	ESRならびにflow methodによる酵素反応機能の研究
	野崎　光洋	(京　大　医)	メタピロカテカーゼの結晶化ならびに2原子酸素添加酵素反応機構の研究
	丸山　工作	(東大教養)	筋肉蛋白質の生化学的研究
1967	石川　晋次	(東　大　医)	細菌における酸化的リン酸化の研究
	永井　　裕	(東医歯大)	コラゲナーゼの特異性について
	田中　武彦	(阪　大　医)	ピルビン酸キナーゼの研究
1968	該当なし		
1969	安楽　泰宏	(東　大　薬)	大腸菌リボ核酸の分解と再利用系に関する酵素学的研究
	武森　重樹	(金沢大理)	酸素添加反応におけるフラビンの機能
	徳重　正信	(京　大　理)	スレオニン脱アミノ酵素におけるアロステリック効果の研究
	藤本大三郎	(東北大理)	ヒドロキシプロリンの生合成と生理的意義
	村田　紀夫	(東理大理)	緑色植物の光合成初期過程における励起エネルギー転移およびエネルギー変換機構の研究
	山形　達也	(名　大　理	コンドロイチン硫酸分解酵素およびコンドロイチン硫酸微細構造の研究
1970	鈴木不二男	(阪　大　歯)	ATPクエン酸リアーゼに関する研究
	中川　八郎	(阪大蛋白研)	アミノ酸栄養の酵素化学的考察―セリン脱水酵素とシスタチオニン合成酵素の役割
	穂下　剛彦	(広　大　医)	胆汁塩の比較生化学的研究
1971	市山　　新	(東　大　医)	哺乳動物の脳および松果体におけるセロトニンの生合成機構に関する酵素化学的研究
	石村　　巽	(京　大　医)	トリプトファンピロラーゼ反応における酸素化型反応中間体について
	金沢　　徹	(阪　大　理)	ATP分解に共役したイオンの能動輸送の分子的機構
1972	一島　英治	(東農工大農)	酸性カルボキシペプチダーゼと酸性プロテイナーゼに関する生化学的研究
	小倉　協三	(東北大非水研)	イソプレノイド生合成における酵素反応の研究
	森野　能昌	(阪　大　医)	Affinity labelingによるアミノ基転移酵素活性域構造に関する研究
1973	石塚　稲夫	(東　大　医)	微生物膜および哺乳類の精巣精子の複合糖脂質―特にグリコシルグリセリドについて
	岡本　　宏	(金沢大医)	ミトコンドリア膜におけるキヌレニン代謝の調節機能の発見とその生理的意義

	大島　泰郎	（菱化生命研）	好熱菌の比較生化学的研究
1974	本川雄太郎	（東北大医）	ラット肝におけるglycineの可逆的開裂反応の機構
	折井　　豊	（阪　大　理）	チトクロム酸化酵素の様態
	静田　　裕	（京　大　医）	スレオニン脱アミノ酵素の制御機構
1975	大島　靖美	（九　大　薬）	大腸菌ラクトースオペロンのリプレッサーに関する研究
	高井　克治	（京　大　医）	Adenylate cyclaseの結晶化とその酵素学的研究
	村松　　喬	（神　大　医）	糖質複合体に作用するグリコシダーゼの研究
1976	新井　賢一	（東大医科研）	ポリペプチド鎖延長因子EF-TuおよびEF-Tsの構造と機能に関する研究
	鈴木　紘一	（東　大　医）	タンパク質の構造と機能の解明に関する研究
	林　　典夫	（東北大医）	肝ミトコンドリアのδ-アミノレブリン酸合成酵素量の調節に関する研究
	古市　泰宏	（国立遺伝研）	有核細胞系メッセンジャーRNAの特異的修飾構造
1977	金ケ崎士朗	（東大医科研）	サルモネラ・ファージ感染の初期過程に関する研究—特にアァージの宿主菌識別の機構について—
	中西　重忠	（京　大　医）	高等動物におけるタンパク合成調節の分子機構に関する研究
	原田　文夫	（国立がんセンター）	転移RNAの構造と機能に関する研究
	平田扶桑生	（京　大　医）	インドールアミン酸素添加酵素の反応機構と生理的意義
1978	上田　国寛	（京　大　医）	ポリADP-リボースの代謝と構造の研究
	三輪　正直	（国立がんセンター）	
	川口　昭彦	（東大応微研）	水素の組み込み方式から見た脂肪酸生合成系における反応の機構および調節に関する研究
	脊山　洋右	（東　大　医）	
	桑野　信彦	（大分医大）	タンパク質生合成におけるペプチド鎖延長因子の遺伝生化学的研究
	本庶　　佑	（東　大　医）	免疫グロブリン遺伝子の構造と発現
1979	井上　圭三	（東　大　薬）	生体膜における脂質二重層部分の動態および役割に関する研究
	大野　哮司	（東　大　理）	ウイルス粒子の形態形成反応の生化学的解析
	加藤　久雄	（九　大　理）	血液凝固の開始反応の分子機構
	関谷　剛男	（国立がんセンター）	tRNA遺伝子構造とその発現機構の解析
	吉田　　匡	（東北大医）	ヘムオキシゲナーゼによるヘムの代謝的分解に関する研究
1980	安藤　　進	（都老人研）	赤血球膜および脳の糖脂質の化学構造に関する系統的研究
	上領　達之	（京　大　医）	機能を異にする二種類の長鎖脂肪酸活性化酵素の発見ならびにその脂肪酸代謝と調節における役割
	虎谷　哲夫	（京　大　工）	ビタミンB_{12}補酵素の機能発現の分子的基礎に関する研究
	渡辺　公綱	（三菱生命研）	高度好熱菌移転RNAの耐熱機構

1981	今井　清博（阪　大　医）	ヘモグロビンのアロステリック効果発現の分子的機序に関する研究
	岡田　典弘（筑波大生科）	tRNAグアニントランスグリコシラーゼとtRNAに存在する微量塩基成分Qの生合成機構
	川崎　敏祐（京　大　薬）	動物レクチンを中心とする糖タンパク質の生化学的研究
	清水　孝雄（京　大　医）	脳神経系におけるプロスタグランジンD_2の代謝と機能に関する研究
	谷口　維紹（ガン研生化）	ヒトインターフェロン遺伝子の構造と機能発見
1982	江角　浩安（国立がんセンター）	無アルブミン血症ラットにおけるアルブミンmRNAのスプライシング異常の研究
	加藤　幸夫（阪　大　歯）	軟骨由来のソマトメジン様成長因子の発見とその生理学的意義
	高井　義美（神戸大医）	生体膜における情報の受容伝達機構に関する研究
	野本　明男（北里大薬）	ポリオウイルス遺伝子の構造と機能に関する研究
	矢沢　道生（北　大　理）	カルモデュリンの化学構造とミオシン軽鎖キナーゼ活性化機構の研究
1983	金沢　　浩（岡山大薬）	大腸菌H^+輸送性ATPaseの遺伝生化学的研究
	西郷　　薫（九　大　医）	真核細胞生物染色体中に存在するmovable genetic elementの構造，性質および起源
	西田　育巧（阪　大　医）	ヒトおよびマウス免疫グロブリンε鎖遺伝子の研究—構造・発現・進化
	樋口　富彦（徳島大薬）	ミトコンドリア内膜の表面に負電荷を発生させるタンパク質(chargerin)の発見：その本体およびエネルギー転換における機能の研究
	山下　克子（神戸大医）	グリコシダーゼ欠損症における糖タンパク質の代謝異常の研究
1984	堅田　利明（北　大　薬）	百日咳菌産生毒素(IAP)の作用機構に関する研究
	祖父江憲治（阪　大　医）	細胞骨格関連カルモデュリン結合タンパク質の発見とその研究
	中村　敏一（徳島大医）	成熟肝実質細胞の増殖と分化を司る細胞膜因子—cell surface modulator—の発見
	野田　昌晴（京　大　医）	エンゲファリン前駆体およびニコチン性アセチルコリン受容体の分子構造
	吉田竜太郎（京　大　医）	細胞内毒素，ウイルス感染およびがん細胞移植によるインドールアミン酸素添加酵素の誘導とその生理的意義
1985	井上　明男（阪　大　理）	ミオシン分子の二つの頭部の機能
	寒川　賢治（宮崎医大）	ヒトおよびラット心房性ナトリウム利尿ポリペプチド(hANPおよびrANP)の精製と構造決定
	鈴木　明身（都臨床研） 橋本　康弘（都臨床研）	糖脂質糖鎖発現の遺伝学的制御の解析
	成宮　　周（京　大　医）	プロスタグランジンD_2とその新しい代謝物Δ^{12-}プロスタグランジンJ_2の生理活性と作用機構に関する研究
	三品　昌美（京　大　医）	神経伝達物質受容体機能の分子的基盤ならびに神経ペプチド遺伝子の発現に関する研究

1986	神奈木玲児	（京　大　医）	血液細胞膜複合脂質の脂肪酸の代謝回転とその生理的意義に関する研究
	喜多村直実	（京　大　医）	キニン-カリクレイン系における遺伝子発現の分子機構に関する研究
	中村　義一	（東大医科研）	転写制御機構の分子生物学的研究
	野口　民夫	（阪　大　医）	ピルビン酸キナーゼアイソザイムの遺伝子と発現の調節に関する研究
	牧野　　龍	（慶　大　医）	ヘム置換法による酸素活性化機構の研究
1987	有賀　寛芳	（東大医科研）	真核細胞におけるDNA複製開始機構の解析
	篠崎　一雄	（名大遺伝施設）	葉緑体遺伝子の構造と発現に関する研究
	谷沢　克行	（京大化研）	ピリドキサル酵素反応の立体化学と分子機構に関する研究
	長田　重一	（東大医科研）	顆粒状コロニー刺激因子(G-CSF)の遺伝子構造とその作用
	前田秀一郎	（熊　大　医）	家族性アミロイドポリニューロパチーの遺伝生化学的研究：遺伝子診断法の確立と病因解析
1988	大野　茂男	（都臨床研）	プロテインキナーゼC群の構造決定，およびその酵素化学的多様性の解析
	小野　功貴	（武田薬工中央研）	
	吉川　　潮	（神戸大医）	
	田中　啓二	（徳島大酵素センター）	プロテアソーム(高分子量多機能プロテアーゼ複合体)の構造と機能
	水野　健作	（宮崎医大）	生理活性ペプチド前駆体のプロセシングに関与する酵素系の生化学的研究
	吉本　谷博	（徳島大医）	動物組織のリポキシゲナーゼの研究
	渡部紀久子	（新技術開発事業団）	プロスタグランディンF合成酵素の構造と機能
1989	岡島　史和	（群馬大内分泌研）	Ca動員性受容体を介した情報伝達系とGTP結合蛋白質
	田中　雅嗣	（名　大　医）	ミトコンドリア電子伝達系酵素欠損症の分子遺伝学
	田邊　　勉	（京　大　医）	骨格筋Ca^{2+}チャンネルブロッカー受容体の構造と機能に関する研究
	藤田　尚志	（阪大細胞工学センター）	インターフェロンシステムにおける遺伝子発現制御機構
	南野　直人	（宮崎医大）	BNP(Brain Natriuretic Peptide)：体液・電解質量・血圧調節作用を示す新しい神経ペプチド
1990	榎森　康文	（東　大　理）	カルシウム依存性プロテアーゼおよびその内因性阻害蛋白質の構造と機能
	大海　　忍	（東大医科研）	
	牧　　正敏	（京大ウイルス研）	
	大久保博品	（京　大　理）	レニン・アンジオテンシン系を中心とした血圧調節機構の分子生物学的研究
	田沼　靖一	（東工大理）	真核細胞の情報伝達・応答系の調節と蛋白質の(ADP・リボシル)$_n$化反応
	前田　正知	（阪大産研）	胃酸分泌酵素(H^+＋K^+)-ATPaseの生化学的研究
	鈴木　知彦	（高知大理）	無脊椎動物巨大ヘモグロビンの分子構築に関する研究



63 多賀谷巽　64 成島正　65 内野仙治　66　　67 廣川幸三郎　68 井上健太郎
69 市原硬　70 大谷泉平　71 足達哲次郎　72 田村正雄　73 慰斗勝昌　74 勝義孝　75 平野寛一　76 三坂亮雄

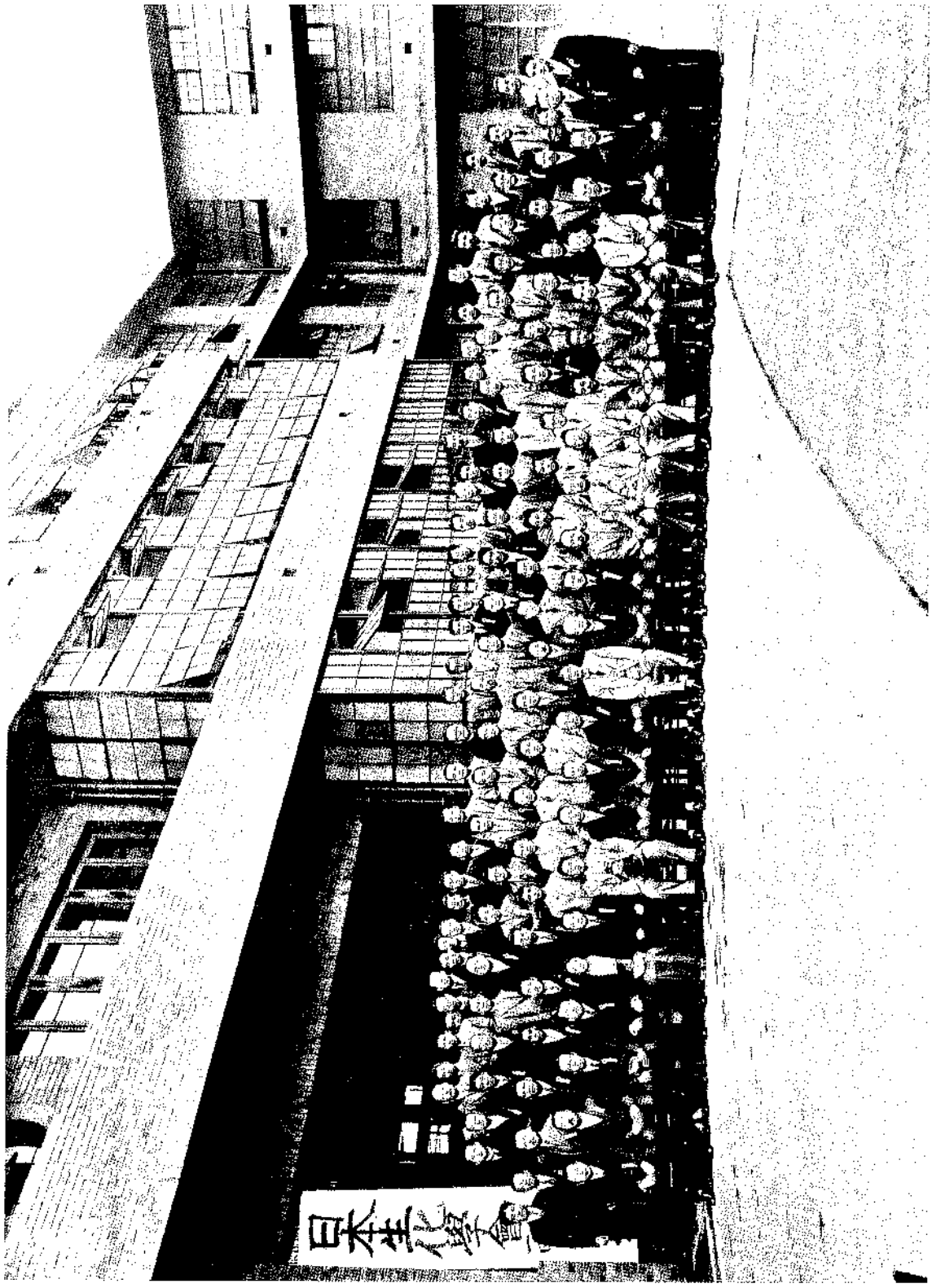
47 淺川桂　48 水野良辰　49 須賀田彦吾　50 佐藤登　51 大島芳生　52 成田不二生　53 岩倉信珍
54 牛圓新太郎　55 小金井良一　56 山田鼎　57 木村政長　58 喜多島保　59 溝澤健兒　60 高橋正雄　61 小田要　62 鈴木惟孝

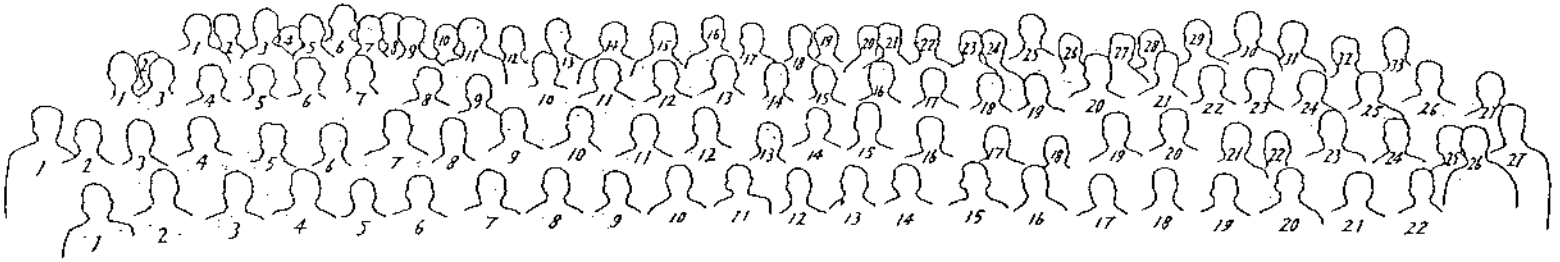
31 遠藤正治　32 米村貞知　33 奥山大三郎　34 赤尾晃　35 川井一　36 小川襄　37 横田喜照　38 五十嵐英吉
39 見玉桂三　40 有山登　41 松島周殺　42 宮本瑛　43 高田守道　44 高岡重雄　45 都築登世　46 早稲田正澄

15 大里俊吾　16 正宗一　17 小田康貞　18 永山武美　19 末吉雄治　20 赤松茂　21 河本禎助　22 小泉親彦
23 竹田正次　24 熊埜御堂進　25 泉仙助　26 海江田純　27 岩瀬龍三　28 岸三二　29 田中靜雄　30 加藤誇一

1 石澤豊松　2 和田長作　3 西岡周蔓　4 木南正叔　5 小澤修造　6 古武彌四郎　7 柿内三郎
8 服内豊　9 佐藤剛毅　10 後藤基幸　11 志方益三　12 須藤憲三　13 辛島詢士　14 松本武一郎

別図1．日本生化学会第4回総会記念写真（1928年10月，金沢）





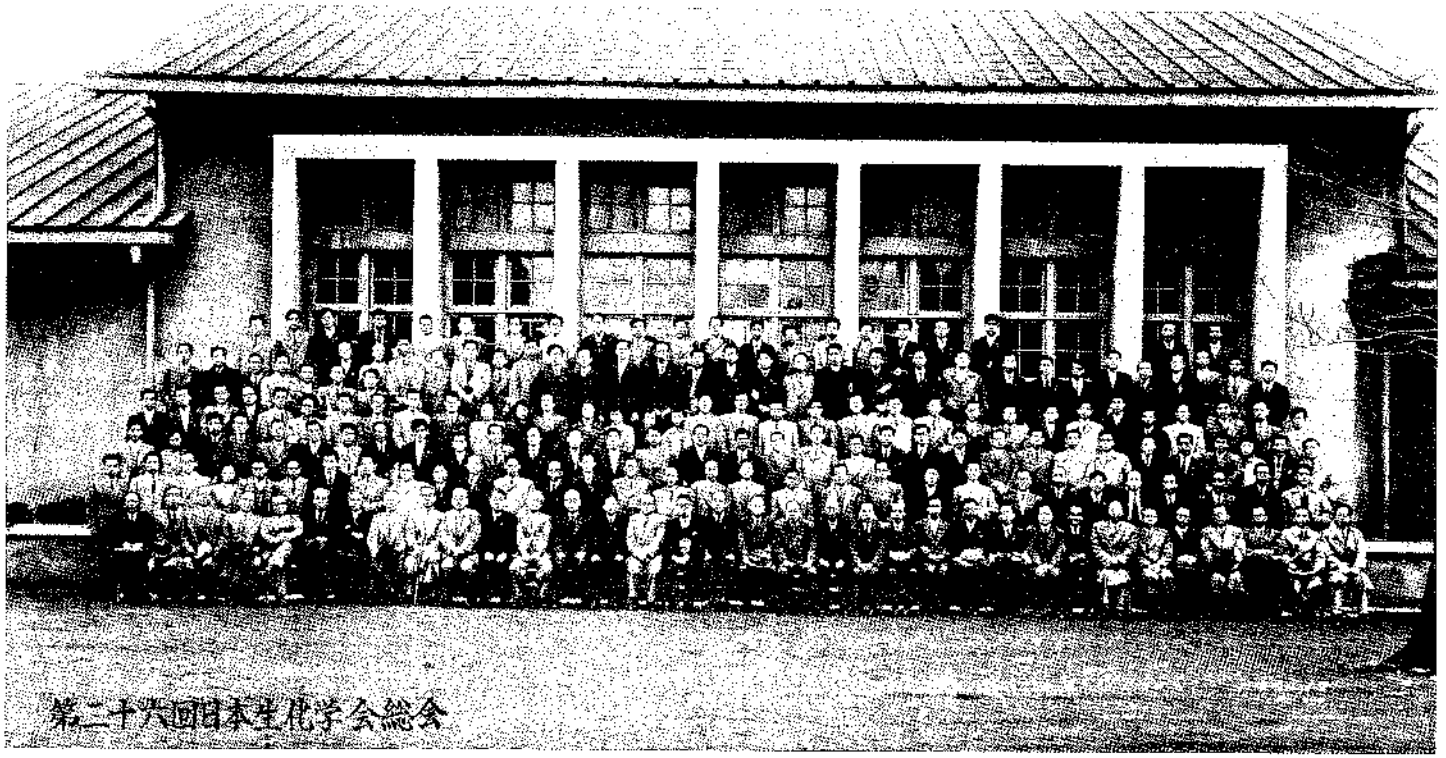
第四列 1水野良辰(慈大) 2多賀谷 美(慈大) 3遠谷 眞一(東大) 4保坂一郎(東大) 5綱井勝安(岡山) 6吉川春寿(東大) 7杉山五郎(岡山)
8今井信吉(名大) 9岩崎 武(岡山) 10宮木 嬉 造(名大) 11山崎三省(岡山) 12葛谷信夫(名大) 13小田及 蔵(九大) 14宮木幸雄(慈大)
15三宮周六(慈大) 16明石修三(京大) 17林田 寛(福大) 18那須和雄(新大) 19角尾 滋(長崎) 20長谷川富士雄(慈大) 21長屋一雄(新大)
22村田文雄(慈大) 23大園真祐(慈大) 24井関 敏(長崎) 25石井謙治郎(慈大) 26庇 篤 潤(慈大) 27山本正吉(阪大) 28後藤貞光(阪大)
29藤 正明(阪大) 30本田直博(阪大) 31渡 澄 國 一(北大) 32風間恒弘(京大) 33毛利吟吉(慈大)

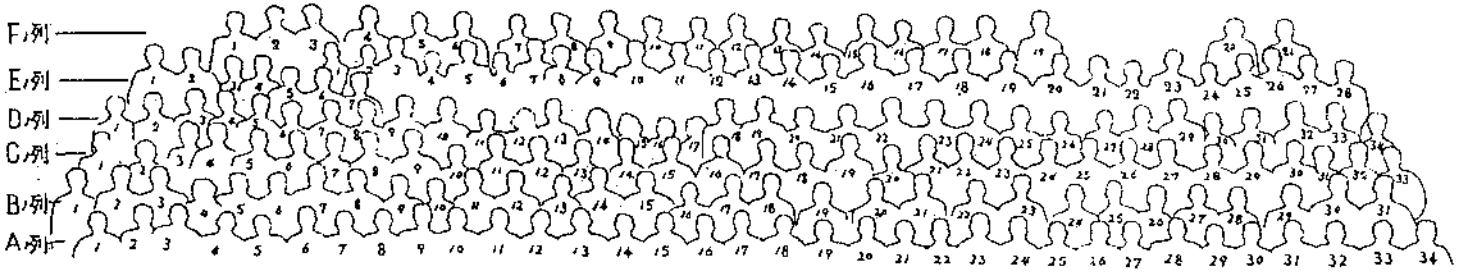
第三列 1鈴木錬二(慈大) 2森 文 彦(慈大) 3山田一之助(慈大) 4宮川貞治(慈大) 5藤村繁郎(東大) 6島崎順雄(東大) 7古山一夫(慶應)
8上代皓三(岡山) 9内野健治(京大) 10葛野幸夫(阪大) 11王子篤一(阪大) 12伊藤良二(九大) 13伏月 覆 亟(千葉) 14橋本貞久馬(千葉)
15赤染郁 清(阪大) 16伊藤 登(阪大) 17大谷染平(阪大) 18海口一二三(神戸) 19小崎源 栄(北大) 20川口雅一(阪大) 21石川清一(女理大)
22富田 誠(慈大) 23谷口孝雄(慈大) 24野口晋一(阪大) 25友井敏男(慈大) 26沼野敬三(慈大) 27鎌 慈 豊 治(阪大)

第二列 1奥田 尊(慈大) 2相澤 義 輝(慈大) 3宮浦 綾 三(慈大) 4青木甲午郎(慈大) 5吉居俊一郎(九大) 6越谷不二雄(九大) 7見玉 覆 徳(名大)
8内野豊生(傳研) 9姜 鎬 申(朝鮮) 10木村敬長(東醫) 11小川孝之輔(千葉) 12田村利男(千葉) 13布施信良(阪大) 14玖山 組 徳(阪大)
15市原 硬(阪大) 16廣川孝三郎(朝鮮) 17兼食千代治(神戸) 18山本 隆 介(神戸) 19浅本 挽 司(神戸) 20岩 鶴 鉦 三(阪大) 21服部 輝二郎(東大)
22成島 正(朝鮮) 23志賀 直(東大) 24内海 栄(慈大) 25曾根田 裕 男(慈大) 26加藤 義 三(慈大) 27栗原 鄭 臣(慈大)

第一列 1藤田 尊 照(慈大) 2小島 蔵(慈大) 3宮本 瑛(東大) 4藤田秋治(北研) 5戸田邦子(女醫) 6泉川八郎(慶應) 7正宗 一(北大)
8藤井鶴三(日醫) 9末吉雄治(慶應) 10前田 順(京大) 11古武彌四郎(阪大) 12梅内三郎(東大) 13永山武美(慈大) 14清水多栄(岡山)
15見玉佳三(九大) 16赤松 茂(千葉) 17後藤基 達(京醫) 18戸田 茂(福大) 19廣畑 祝 造(慶醫) 20竹田正次(神戸) 21浦 良 好 太(阪大)
22平松 鶴 吉(慈大)

別図2．日本生化学会第11回総会記念写真（1935年10月，東京慈恵医大）


第二十六回日本生化学会総会


F列
E列
D列
C列
B列
A列

F ノ列

1 立野宵郎　2　3 下村逮雄　4 赤間二郎　5 松田瀬　6 谷野淳　7 筑屋務　8 小倉良平　9 山代正　10 阿南功一　11 島居俊三　12 井上哲夫　13 沼部治夫　14 長谷川晋　15 川崎裕也　16 長谷川和　17 波多野博行　18 永井裕　19 牧野憲二　20 菅野矢郎　21 榎本

E ノ列

1 箱守仙一郎　2 小林勝太郎　3 小川清　4 井上彬　5 妹尾博文　6 石東嘉男　7 小森義隆

1 石本真　2 石原一郎　3 久野滋　4 小野山實　5 石黒伊三雄　6 森下宗司　7 金井正光　8 高橋嘉常　9 田中公一　10 佐々木昭雄　11 高杉直幹　12 野村正　13 畳道幸男　14 梶田昭彦　15 柿智一　16 鈴木光雄　17 神長善　18 中島隆　19 檜山登　20 長井靖　21 松田基一　22　23　24 奥村二吉　25 志村憲助　26 内田正男　27 高橋等　28 小野田重敏

D ノ列

1 加英山茂利　2 立木蔚　3 北島英一郎　4 照内淳也　5 小石秀夫　6 中尾真　7 石田定

8 柴田正行　9 佐々木功　10 高垣玄吉郎　11 阿武喜美子　12 石田美枝　13 関根隆光　14 藤野冷子　15 千葉ヨリエ　16 長崎多美子　17 谷照代　18 谷整樹　19 稲田鉞郎　20 菱川正夫　21 新井富太郎　22 琴基昌　23 松村啓雄　24 蒲龍人　25 青木寛　26 中山義之　27 荒谷真平　28 津島慶三　29 馬場快彦　30 大田尚志　31 今村登　32 小野猛　33 麥倉義司　34 佐竹一夫

C ノ列

1 鈴木龍太　2 和田水　3 田宮信雄　4 安藤鉞郎　5 熊田正德　6 清水達人　7 市原明

8 白井陽一　9 松中昭一　10 武藤彬彦　11 藤野浩平　12 佐伯馭　13 金田伸　14 高島博光　15 今井陽　16 平井秀松　17 森太郎　18 柴田幸雄　19 中村彌　20 三代幸彦　21 益田實　22 齋藤紀一　23 坂岸良充　24 小林茂三郎　25 千葉靖男　26 竜地吾郎　27 小野繁　28 工藤二一　29 遠藤雅也　30 吉田昭　31 稲田瑞枝　32 安藤晴弘　33 磯島晋三

B ノ列

1 八木國夫　2 遠山隆之　3 皆川基　4 橋本千恵子　5 吉澤善作　6 鈴木伸夫

7 紺野邦夫　8 後田敏雄　9 田中伸一　10 三坂亮雄　11 岡田潔　12 塚田裕三　13 西川英次郎　14 石渡和男　15 明石修三　16 數野太郎　17 關根道夫　18 上田彰　19 古武彌人　20 黒田嘉一郎　21 小原喜重郎　22 吉田大三　23 小西一　24 松村義寛　25 永井諄爾　26 鶴見勝一　27 千葉博　28 中島信夫　29 伊藤登　30 吉川清　31 森山忠重

A ノ列

1 大谷象平　2 吉川泰壽　3 平出順吉郎　4 廣畑龍造　5 岩崎憲　6 宮本璋　7 小川巖

8 藤井暢三　9 市原硬　10 堀田一雄　11 藤田秋治　12 赤松茂　13 兒玉桂三　14 内野仙治　15 永山武美　16 正宗一　17 藤瀬新一郎　18 末吉雄治　19 安田守雄　20 中村拓　21 上代皓三　22 金尾清造　23 為藤順雄　24 二國二郎　25 奥貫一男　26 勝義孝　27 高田蔣　28 馬淵秀夫　29 江上不二夫　30 山添三郎　31 伊藤四十二　32 須田正巳　33 牧野堅　34 川島實

別図3．日本生化学会第26回総会記念写真（1954年4月，仙台）

1 小野寺幸之進
2 奥貞一男
3 貴志雪太郎
4 早石修
5 岩崎憲
6 市原硬
7 島薗順雄
8 赤堀四郎
9 B.L. Horecker
10 古武弥人
11 W. E. Knox
12 藤田秋治
13 富田雅次
14 小倉良平
15 森健志
16 松下祥夫
17 鈴木旺
18 柴谷篤弘
19 中村正二郎
20 舟橋三郎
21 石館守三
22 中尾直
23 水原舜爾
24 丸尾文治
25 辻稔
26 上田隆史
28 下地孝雄
30 丹羽正治
41 安田守雄
42 赤松茂
43 堀田一雄
44 藤井暢三
45 上代皓三
46 浅田敏雄
47 八木國夫
48 倉沢文夫
49 小原喜重郎
50 田中正三
52 三坂亮雄
53 匝司博信
66 古市泰宏
67 小倉安之
68 殿村雄治
69 荻原文二
70 日坂亮
71 高取吉太郎
72 石坂音治
73 石原一郎
74 森下宗司
75 竹田義明
76 山野俊雄
77 押鐘篤
78 伊勢村寿三
79 藤野安彦
80 宇佐美正一郎
81 荒谷真平
91 赤木満洲雄
92 松村勇一
93 佐竹一夫
94 笹川泰治
95 川嶋素子
96 宇山順子
98 内田槙男
99 和田博
100 奥田誠一
101 今井陽
102 青島雄吾
103 鶴見膠一
104 吉沢善作
105 足達彌三郎
106 橋本かず
107 城戸亮
108 中川英雄
109 吉利和
110 稲葉耕三
111 李民化
112 西沢一俊
113 鈴木芳太郎
114 金森正雄
115 塚元久雄
116 川崎近太郎
117 水谷彰
118 山田弘子
119 鈴木龍太
120 関田潔
122 坂本幸哉
123 小野宗三郎
124 津島慶三
125 上原喜八郎
126 成田耕造
127 山科郁男
128 宇井信生
130 江上不二夫
131 満田久輝
132 三浦夢彰
133 松村義寛
134 黒田嘉一郎
135 浮田忠之進
136 山崎三省
137 神前武和
138 上田彰
139 柴田幸雄
140 大谷元太郎
141 須田正己
142 伊藤登
200 荻野泰道
216 山添三郎

別図4．日本生化学会第37回総会記念写真（1964年10月，名古屋）

日本生化学会65年の歩み —1990—

（「生化学」64巻9号（1991）掲載記事原稿）

プリント：平成3年（1991）9月1日

筆者：島薗順雄（しまぞの のりお）

東京大学名誉教授，日本生化学会名誉会員，医博．

略歴：1906年東京市に生る．1929年東京帝国大学医学部卒業．1934年同大学医学部生化学教室助手．1944年同大学付属医学専門部講師．1947年新潟医科大学教授．1952年東京大学教授（医学部生化学講座担任）．1964年東京大学医学部長．1966年東京医科大学教授．1976年同大学退職．

日本生化学会関連略歴：1934年～1941年日本生化学会会報編集係．1947年～48年評議員，1949年～53年理事，1954年～62年常任理事，1959年日本医学会生化学分科会会長，1963年本会会長，1964～65年常任理事および社団法人設立代表者，1949年～65年編集委員，1966年社団法人副会長，1967年第7回国際生化学会議（東京）組織委員長，1968年～77年および1980年～83年監事，1971年名誉会員．

住所：〒113 東京都文京区千駄木3-3-3（電話 03-3821-0628）